

物理學教科書 卷之四

海軍機關學校

生徒第三學年

昭和八年十二月



昭和八年十二月

海軍機關學校長 小野寺 恕

本書ニ依リ物理学ヲ修得スヘシ

第一版 昭和八年十二月 海軍教授 岡崎 一二三 編 纂

沿 革

本書は海軍中隊艦艇學を基として

海軍中隊艦艇學の沿革を述べ、その

昭和八年十二月

海軍中隊艦艇學の沿革を述べ、その

第一編 熱力學

第一章 熱力學第一法則及物質運動論

# 物理學

## 卷之四

### 目次

第一編 熱力學 .. .. .	ix
第一章 熱力學第一法則及物質運動論 ..	1
一、熱ノ本體 .. .. .	1
二、熱ト「エネルギー」 .. .. .	3
三、熱力學第一法則 .. .. .	6
四、物質分子ノ集合状態 .. .. .	7
五、熱ト溫度ノ本質 .. .. .	10
六、物質運動論 .. .. .	10
七、氣體ノ壓力 .. .. .	10
八、溫度ト運動「エネルギー」 .. .. .	12
九、内部「エネルギー」及状態方程式 .. .. .	14
一〇、Jouleノ實驗及 Joule-Thomson 効果 .. .. .	16
一一、實在氣體ノ状態方程式 .. .. .	19
一二、氣體ノ比熱 .. .. .	22
一三、完全氣體ノ完義 .. .. .	27
一四、斷熱變化及等溫變化 .. .. .	27

第二章 熱力學第二法則	34
一五、可逆變化及非可逆變化	34
一六、熱機關及 Carnot 輪廻	37
一七、壓力ト沸騰點及融解點トノ關係	39
一八、斷熱的伸長ニ基ク溫度ノ變化	41
一九、熱力學第二法則	42
二〇、熱機關ノ効率, Carnot ノ定理	46
二一、可逆機關ノ効率	47
二二、熱力學的絕對溫度尺度	49
二三、任意ノ可逆輪廻及非可逆輪廻	52
二四、「エントロピー」	53
二五、「エントロピー」溫度線圖	54
二六、「エントロピー」ノ計算	56
二七、「エントロピー」増加ノ定理	58
第二編 傳熱論	60
第一章 固體內ノ熱傳導	60
第一節 傳熱一般基本式	60
一、熱傳導ノ基本式	60
二、熱傳達ノ基本式 (Newton ノ冷却則)	65
三、熱貫流ノ基本式	67
第二節 定常熱傳導	68
四、概說	68
五、平面壁	69

六、直線圓管(圓筒)	78
七、直線棒	85
第三節 不定常熱傳導	90
八、概說	90
第四節 特殊熱傳導	92
九、內部ニ熱源アル圓柱(又ハ針金)ノ定常傳導	92
第二章 對流ニヨル傳熱	97
一〇、概說	97
第三章 輻射ニヨル傳熱	101
一一、概說	101
第一節 輻射吸收ニ關スル基礎理論	103
一二、輻射能, 吸收能及完内黑體	103
一三、完全黑體輻射ニ關スル諸法則	105
一四、非黑體(灰色體)輻射	108
一五、輻射ノ強サト距離トノ關係並ニ Lambert ノ法則	109
一六、Kirchhoff ノ法則	112
一七、Kirchhoff ノ空洞ニヨル黑體輻射ノ實現	116
一八、輻射高溫計	117
第二節 輻射ニヨル二固體間ノ熱授受	120
一九、一物體ガ他物體ニ圍マレタル場合	120
二〇、無限大ノ二表面ガ平行ニ置カレタル場合	125



# 物理學

## 卷之四

### 第一編

### 熱力學

#### 第一章

#### 熱力學第一法則及物質運動論

##### 一、熱ノ本體、

熱ニ關スル諸現象並ニソレニ對スル諸法則ハ既ニ詳細ニ知悉セル所ナリ、然レドモ熱ノ何物ナリヤノ點ニ就イテハ未ダ明ナラザル可シ、昔ハ是レヲ物質ノ一種ト考ヘ熱素 (Caloric) ト呼ビタリ、而シテ溫度ノ高低ハ此ノ量ノ多少ニ依ルモノニシテ、傳導ハ之ノ移動ニ依ルモノトセリ、第十八世紀ノ終頃ニ於テモ熱ハ燃素ト火氣トヨリ成ルモノトシ、辰砂ト熱トノ化學作用ヲ説明スルニ

辰砂 + 熱 = 辰砂 + 燃素 + 火氣 = 水銀 + 火氣  
ナル式ノ示ス如ク、熱ガ燃素ト火氣トニ分解シ、辰砂ト燃素ト化合シテ水銀トナリ、火氣ハ空中ニ逸出スト考

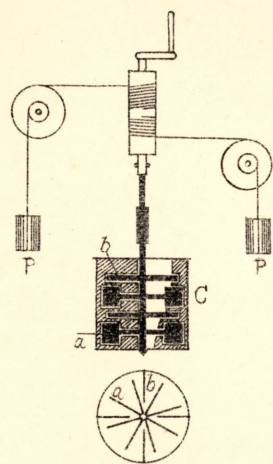
ハタルモノナリ、熱力學上ニ有名ナル Carnot 氏モ亦熱ハ物質ナリト信ジ、熱ニ依リテ熱機關ノ働クハ恰モ水ニ依リテ水車ノ働クト同一ナリトシ、高所ノ水ガ水車ヲ廻轉シテ低所ニ下ルモ其ノ水量ニ増減無キガ如ク、高温度ニアル熱ガ熱機關ヲ働カシ低温度ニ降ルトキ、其ノ前後ニ於テ熱量ニ差異ナシト假定セリ、然シ何レノ説ニセヨ熱ヲ物質トスル以上、熱輻射及摩擦等ノ現象ヲ説明スル事不可能ナリ、然ルニ Rumford 氏ハ大砲製造ニ際シ無限ニ發熱スルノ事實ヨリ、熱ハ物質ニ非ザルベシト論ジタルモ、世人ハ概ネ金屬内ニハ非常ニ多量ノ熱ヲ包有スルモノニテ、恰モ海綿ニ水ヲ含有セル如キモノナリト信ゼリ、然ルニ Davy 氏ハ二個ノ氷塊ヲ互ニ摩擦シテ之ヲ融解セシメ得タルノ事實ヨリ、此融解ニ要セシ潜熱ハ氷塊中ニ含有シ得ザル筈ニシテ、摩擦ニ費セル仕事ガ熱ニ變ゼルナラントノ説ヲ主張スルニ到レリ、

熱ハ仕事ニ變ジ、仕事ハ熱ヲ生ズルモノニシテ相互ニ一定不變ノ關係アリトノ説ヲ主張セル先覺者ハ Meyer 氏ナリ、「エネルギー」保存則ニ依ルトキハ之ハ當然ノ結論ニシテ、熱機關ハ水車ト其ノ理ヲ等シクセズシテ寧ロ高速度ヲ以テ運動セル物體ガ仕事ヲ爲セル後ニソノ速度ヲ減ズルト同様ニ高温度ノ媒質ガ仕事ヲ爲セル後ニハ其ノ温度ヲ減ズルモノニシテ熱モ亦一種ノ運動ニ過ギザルモノナリ、



## 二、熱ト「エネルギー」、

摩擦,衝突等ニ依ル熱發生ヲ考フルニ之ハ他面力學的「エネルギー」ノ消費ヲ伴ヒ、又熱ノ消失ノ際(例ヘバ蒸氣機關内ノ蒸氣ガ吸鑄ヲ介シテ外壓ニ逆ヒ力學的仕事ヲ爲シツツ膨脹シ熱ヲ失ヒテ冷却スル場合ノ如ク)必ズ或種ノ「エネルギー」ノ發生ヲ伴フモノナリ、斯ノ如ク熱ノ發生,消失ガ力學的「エネルギー」ノ消費,發生ヲ伴フモノナルヲ見テモ當然熱ハ一種ノ「エネルギー」ナリト看做スヲ得、從ツテ兩者ノ單位間ノ關係ハ極メテ密接ニシテ何レノ單位ヲ以テシテモ熱並ニ「エネルギー」ヲ表ハス事ヲ得ベキナリ、



兩者間ノ數量的關係ニ就イテ初メテ直接的實驗ヲ行ヒシハ Joule 氏ニシテ、其ノ實驗ハ圖示ノ如キ水熱量計 C ノ内部ニテ羽根車 a ガ器壁ヨリノ翼 b ノ間ヲ縫ヒテ廻轉シ、水ヲ攪亂スルトキ内部摩擦ニ依ル發熱量ヲ前後ノ溫度差ヨリ計算シ、一方廻轉ニ費セル力學的「エネルギー」ハ廻轉ノ爲ニ滑車ヲ介シテ

吊サレタル分銅 P ノ降下距離ト、上下ノ速度ヨリ、位置「エネルギー」ノ減少ト運動「エネルギー」ノ増加ノ差トシ

ヲ算出シ、此ノ得タル熱量ト失ヘル力學的「エネルギー」ト  
 ヲ比較シ、其ノ相互關係トシテ 1「カロリー」ノ熱ハ約  
 $4.2 \times 10^7$ 「エルク」ノ力學的「エネルギー」ニ對應スル事ヲ見  
 出セリ、其ノ後彼及其ノ他ノ人々ニヨリテ爲サレタル  
 色々ノ實測、例ヘバ固體間ノ摩擦、又ハ衝突ノ際ノ熱發  
 生、或ハ電氣「エネルギー」ト熱トノ轉移ノ間接實驗等ニ  
 於ケル結果、力學的「エネルギー」Wト之ト轉移スル熱量  
 Qトハ常ニ一定ノ比ヲ以テ對應スル事が見出サレ此  
 ノ比ノ精密ナル値ハ

$$\frac{W}{Q} = J = 4.185 \times 10^7 \frac{\text{erg}}{\text{cal}}$$

$$\frac{Q}{W} = A = 0.2389 \times 10^{-7} \frac{\text{cal}}{\text{erg}}$$

ナリ、即チ或量ノ熱量ハ數量的ニ其ノJ倍ノ力學的  
 「エネルギー」ニ轉移シ、又Wナル量ノ力學的「エネルギー」  
 ハ數量的ニ其ノA倍ノ熱量ニ轉移シ得ルナリ、此ノ意  
 味ニ於テJヲ熱ノ仕事當量(Mechanical equivalent of heat)  
 ト云ヒAヲ仕事ノ熱當量(Heat equivalent of mechanical  
 work)ト云フ、

[注意] 工業上ニ用ヒル實際計算ハ仕事ノ單位トシ  
 テ重力單位ヲ用ヒ、又熱量ノ單位トシテハ「キロカ  
 ロリー」(Kcal)、英熱單位(B. t. u.)、呖攝氏度(C. h. u.)  
 ヲ用フ、之等ノ關係ヲ示サバ下ノ如シ、

$$\text{仕事} \begin{cases} 1 \text{ ft.-lb.} = 0.1383 \text{ kg.-m.} = 1.356 \text{ joules.} \\ 1 \text{ joule} = 0.102 \text{ kg.-m.} = 0.7373 \text{ ft.-lbs.} \end{cases}$$

$$\text{熱量} \begin{cases} 1 \text{ Kcal} = 3.97 \text{ B. t. u.} = 2.205 \text{ C. h. u.} \\ 1 \text{ B. t. u.} = 0.252 \text{ Kcal} \\ 1 \text{ C. h. u.} = 0.4536 \text{ Kcal} \end{cases}$$

從ツテ J ノ數值ハ各單位ニ依リ異ル、即チ

$$J = 427 \frac{\text{kg-m}}{\text{Kcal}} = 778 \frac{\text{ft-lbs}}{\text{B. t. u.}} = 1400 \frac{\text{ft-lbs}}{\text{C. h. u.}}$$

### 練習問題

1. 攪拌用羽根車ヲ裝置セル熱量計ニ水 920 瓦ヲ入レ羽根車ニ  $1.2 \times 10^8$  dyne-cm ノ偶力ヲ與ヘ 420 廻轉セシメシトコロ水ノ溫度ガ  $8^\circ\text{C}$  上昇セリ、熱量計一切ノ水當量ヲ求ム、
2. 10 斤ノ落體ガ 200 米ノ速度ニテ地面ニ衝突セリ、其ノ際幾何ノ熱量ヲ發生スベキヤ、
3. 42 斤ノ物體ヲ 20 米ノ速度ニテ眞上ニ抛ゲタルニ 10 米ノ高サ迄シカ達シ得ザリシト、然ラバ其ノ時「エネルギー」ノ損失如何、若シ其ノ損失ガ途中ニテ空氣トノ摩擦ニヨリ熱ニ化セリトセバ如何程ノ熱量ナリシカ、
4. 同一直線上ヲ每秒 20 米ノ速度ニテ飛ブ 19 斤ノ鉛丸ト、反對ノ方向ニ每秒 70 米ノ速度ニテ飛ブ 8 斤ノ鉛丸トガ衝突シテ一塊トナルトキ、此ノ鉛丸ハ其ノ後如何ナル運動ヲナスヤ、又此ノ時鉛丸ノ溫度幾度昇ルヤ、但シ鉛ノ比熱ヲ 0.030 トス、

物理学第一卷 力学 第三章

（1）

（2）

（3）

（4）

（5）

（6）

（7）

（8）

（9）

（10）

（11）

（12）

（13）

（14）

（15）

（16）

（17）

（18）

（19）

（20）

（21）

（22）

（23）

（24）

（25）

（26）

（27）

（28）

（29）

（30）

（31）

（32）

（33）

（34）

（35）

（36）

（37）

（38）

（39）

（40）

（41）

（42）

（43）

（44）

（45）

（46）

（47）

（48）

（49）

（50）

（51）

（52）

（53）

（54）

（55）

（56）

（57）

（58）

（59）

（60）

（61）

（62）

（63）

（64）

（65）

（66）

（67）

（68）

（69）

（70）

（71）

（72）

（73）

（74）

（75）

（76）

（77）

（78）

（79）

（80）

（81）

（82）

（83）

（84）

（85）

（86）

（87）

（88）

（89）

（90）

（91）

（92）

（93）

（94）

（95）

（96）

（97）

（98）

（99）

（100）

### 三、熱力學第一法則、

熱力學トハ熱ガ「エネルギー」ノ一態ナル事ヲ基礎トシ熱的現象ヲ力學的ニ取扱フ部門ニシテ、其ノ第一法則トハ既ニ前述セルモノナリ、或量 $Q$ ノ熱量ノ消失ハ必ズ一定量 $JQ$ ノ力學的「エネルギー」ノ發生ヲ伴ヒ、逆ニ $W$ ノ力學的「エネルギー」ノ消失ハ必ズ一定量 $AW$ ノ熱ノ發生ヲ伴フ、即チ熱ト力學的「エネルギー」間ノ轉移ニ於テ「エネルギー」ハ保存サル、之熱力學ノ第一法則ニシテ熱ガ關與セル場合ノ「エネルギー」保存則ニ外ナラズ、

第一法則ノ式的表現、物體ガ外部ヨリ熱ヲ得レバ、一般ニ次ノ如キ状態變化ヲ伴フ事ハ既ニ知ル所ナリ、

(1) 加ヘラレタル熱ノ一部分ハ物體ノ分子ノ運動「エネルギー」増加ノ爲ニ用ヒラレ、從ツテ物體ノ溫度ハ上昇シ顯熱トシテ貯ヘラル、之ヲ $dK$ ニテ表ス、

(2) 溫度ノ上昇ニ伴ヒ一般ニ體積増加ヲ來ス、即チ分子相互間ノ力ニ逆ヒ内部的ニ仕事ガ爲サレ、尙若シ加熱過程ノ間ニ融解又ハ蒸發ノ如ク分子集合ノ状態變化ヲ伴ハバ之等ハ分子潜熱ノ「エネルギー」トシテ貯ヘラル、之ヲ $dP$ ニテ表ス、

(3) 物體ガ外壓ニ逆ヒ體積ヲ變ズルヲ以テ外部ニ對シテ力學的仕事ヲナス、之ヲ $dW$ ニテ表ス、

故ニ今 $dQ$ ヲ與ヘラレタル全熱量トセバ第一法則ノ意

味ハ

$$dQ = dK + dP + dW$$

トナリ、式中  $dK + dP$  ハ物体内ニ貯ヘラルルヲ以テ内部「エネルギー」(Internal energy) ト稱シ、 $dU$  ヲ以テ表サバ上式ハ

$$dQ = dU + dW$$

トナル、茲ニ  $dW$  ハ物体外ニ貯ヘラレ此ノ部分ガ力學的の仕事トシテ實用ニ供セラルルモノナリ、即チ此ノ外部仕事ヲ得ル装置ヲ最モ有効ニ解決セントスル問題ガ吾人ノ熱機關研究ノ對象ナリ、今外壓  $p$  ニ於テ容積變化  $dv$  ヲ生ゼリトセバ  $dW = pdv$  ナルヲ以テ上式ハ更ニ

$$dQ = dU + pdv$$

ト書き表ス事ヲ得ルナリ、第一法則ハカクノ如ク一層基礎的ナル形ニ表現シ得ルナリ、之ヲ一般的ニ「エネルギー」式ト稱ス。

[注意 1] 物體ガ熱ヲ他ヨリ得タル時  $dQ$  ノ符號ヲ正、他ニ與ヘタル時ハ負、又膨脹ニ依リ外部ニ仕事ヲ爲ス時ハ正、外部ヨリ仕事ガ爲サルル時即チ壓縮サルル時ヲ負ト定ム、

[注意 2] 「エネルギー」式ニ於テ特ニ斷ハラザルモ左右兩邊トモ同種ノ單位ニ換算セルモノナリ、

#### 四、物質分子ノ集合狀態、

凡テ物質ハソノ物質ノ最後ノ因子タル分子ヨリ成

リ、分子ハ一種或ハ數種ノ或元素ノ原子ヨリ成リ、之等  
 ガ如何ニ集合シテ物質ヲ構成セルカニ就イテハ分子  
 原子ノ個々ノ性狀ヲ詳ニスル必要アリ、之ニ就イテハ  
 原子構造論ニ於テ述ブル事トシ、茲ニハ單ニ物質構成  
 ニ就イテノ大凡ノ觀念ヲ明ラカニスルノミニ止ム、化  
 學ニ於テ既ニ知レル如ク物質1瓦分子中ノ分子數  $N$   
 ハ總テノ物質ニ付テ相等シク又ソノ容積ハ標準狀態  
 ニ於テ 22.414 立ナルヲ以テ1瓦分子中及1立方厘中  
 ノ分子數  $N$  及  $n$  ハ夫々

$$N = 6.064 \times 10^{23}$$

$$n = 2.706 \times 10^{19}$$

ナリ、之ヲ Avogadro or Loschmidt 數ト稱ス、常態ノ氣體ニ  
 於ケル分子相互距離ハ一樣ニ排列セルトシテ約  $3.3 \times 10^{-7}$   
 厘即 33 Å 程度ナリ、固體液體ニ於ケル分子相互距離  
 ハ勿論物質ニ依リ異レルモ密度ヨリ概算シテ 1 Å 或  
 ハ數 Å ノ程度ナリ、分子或ハ原子ノ大サハ假ニ彈性球  
 ト考フレバ諸種ノ實驗ニ依リ半徑ガ 1 Å 乃至數 Å ノ  
 程度ニシテ、分子或ハ原子ノ質量ハ水素原子ニ於テ約  
 $1.66 \times 10^{-24}$  瓦其他ノ物質ノ分子、原子ニ於テハ約之ノ分  
 子量倍、原子量倍ナリ、又原子ハ所謂原子力ヲ相互間ニ  
 及ボシ、又分子ヲ一單位トシテ見レバ原子力ノ或ル合  
 成効果タル分子力ヲ互ニ及ボス、而シテ分子相互距離  
 ノ遠キ氣體ハ各分子ガ分子力ノ影響ヲ殆ド受ケズ獨  
 自ニ存在シ得、從ツテ原子力モ之ヲ構成スル一分子内  
 ニ於テノミ作用セルモ、各分子ガ近接シ且ツ規則的ナ

化学教科書に確認を要ス

1分子占ム容積

$$\left( \frac{1}{2.706 \times 10^{19}} \right) \text{cm}^3$$

$$= 3.68 \times 10^{-20} \text{cm}^3$$

$$\therefore \sqrt[3]{3.68 \times 10^{-20}} = 3.3$$

$$= \sqrt[3]{36.8 \times 10^{-27}} = 3.3 \times 10^{-9} \text{cm}$$

ル排列ヲトル固体ニ於テハ原子力ハ一分子内ニ於テノミナラズ他ノ分子ニモ働キカク、從ツテ固体ニ於テハ分子ヨリモ寧ロ原子ヲ其ノ構成單位ト見ルヲ要ス、液体ハ固体ヨリモ分子トシテノ獨自性が強クソノ分子力ハ氣體ニ比スレバ甚ダ効果的ナリ、

氣體ノ分子運動、氣體ハ自ラ體積ヲ保持シ得ズ急速ニ擴散スル事及密度甚ダ小ナル事ヨリ見テ其ノ各分子ハ他ノ分子ノ作用限外ニ在リテ自由ニ運動シ他ノ分子ニ非常ニ接近セルトキ或ハ衝突セル場合ニ於テ方向ヲ變ヘル以外ハ直線的等速運動ヲナシツツアルモノト考ヘラル、

液体ノ分子運動、液体ハ體積ヲ保持シ得ルガ形ノ變化即チ沁リニ對シテ殆ド無抵抗ナル事及擴散等ヨリ見テ其ノ各分子モ一定位置ニ存在セズ常ニ動キツツアルモノニシテ、所謂「ブラウン」運動ナルモノニ依リテ見ルモ分子運動ノ存在ノ實證ヲ認ムル事ヲ得ルナリ、又其ノ密度ヨリ考ヘソノ分子運動ハ分子相互力ノ作用ノ下ニ極メテ不規則ナルモノナリ、

固体ノ分子運動、固体ニ於テハ彈性其ノ他ノ諸物性ヨリ其ノ各分子或ハ原子ハ分子力或ハ原子力ノ作用ノ下ニ各一定ノ平衡位置ヲ保持シ排列セルト考ヘラレ、實際 X 線的研究ニヨリ其ノ排列關係ヲ見出し得ルモノナルガ、之ニ就イテハ別ニ學ブベシ、斯ノ如ク固体ニ就テハ分子或ハ原子ハソノ平衡位置ヲ保持シツツ振動スルモノナリ、

## 五、熱ト温度ノ本質、

熱ガ「エネルギー」ノ一態デアリ、一方上述ノ如ク分子ガ運動セルモノトセバ熱ハ分子ノ運動「エネルギー」ニ外ナラズト見ルガ最モ見易キ直觀的ナル見方ニシテ、以下順次述ブル如ク諸現象ハ之ニヨリテ説明サレ、此ノ考ノ妥當ナルヲ示ス、又同一熱容量ノモノニ就キテ考フレバ熱ノ多寡ノ程度ヲ示ス温度ナルモノハ分子ノ運動「エネルギー」ノ或ル Level ヲ表スモノナリ、

## 六、物質運動論、

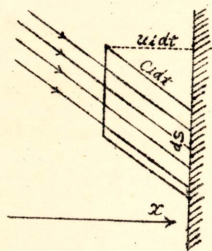
先ヅ物質ヲ構成セル分子ノ運動ヲ假定シ熱ヲソノ運動「エネルギー」ト見此ノ考ヲ基礎トシ種々ノ物性ヲ分子集合體ニ對スル力學的取扱ニ依リテ説明セントスル一部門ガ物質運動論ナリ、固體液體ニ就イテハ既ニ之ヲ知ル、此ノ理論ノ熱的、力學的物性ノ最モ簡單ナルハ氣體ニシテ從ツテ氣體運動論トシテ最モ發達セリ、以下之ニ就イテ述ベン、而シテ其ノ際分子ハ力學的性質ヲ考慮スル時完全彈性的ナル滑ナ剛キ球體ト考フ、

## 七、氣體ノ壓力、

氣體ガ器壁ニ及ボス壓力ハ氣體分子ノ衝突ニ起因スルモノト考ヘラル、今器中ノ分子ハ種々ノ速度ヲ有シ此ノ全分子ヲ無數ノ群ニ分チ各群中ノ分子ハ總テ同ジ速度ヲ有スルトシ各群ニ屬スル單位體積中ノ分



子數ヲ夫々  $\nu_1, \nu_2, \dots, \nu_i, \dots$  トス、圖示セル如ク



器壁上ノ微小面積ヲ  $dS$  トシ  
之ニ垂直ナル方向ニ  $x$  軸、平行  
ナルニ方向ニ  $y, z$  軸ヲトリ、 $i$  群  
ノ分子ノ速度  $c_i$  ノ  $x, y, z$  ノ分  
速度ヲ  $u_i, v_i, w_i$  トセバ  $i$  群分子  
ノ射流ニ依リ  $dS$  面ガ  $dt$  時間  
ニ受クル衝突分子數ハ底面積  
 $dS$ 、高サ  $u_i dt$  從ツテ容積  $u_i dt dS$

ナル柱體中ノ  $i$  群ノ分子數  $\nu_i u_i dS dt$  ナリ、偕  $i$  群中ノ各  
分子ガ衝突ニ依リ受クル運動量ノ變化ハ完全彈性球  
ト看做セルヲ以テ分子質量ヲ  $m$  トセルトキ  $2m u_i$  ナ  
リ、故ニ  $dt$  時間ニ  $dS$  面ニ衝突スル  $i$  群分子ノ運動量  
ノ變化ハ  $2dS dt \nu_i m u_i^2$  トナリ全分子ノ運動量ノ變化ハ  
 $2dS dt \sum \nu_i m u_i^2$  トナル、之ガ  $dS$  面ノ  $dt$  時間ニ受クル力積  
 $p dS dt$  ト等シカルベキニ依リ

$$p dS dt = 2dS dt \sum \nu_i m u_i^2$$

$$\therefore p = 2 \sum \nu_i m u_i^2$$

茲ニ  $\sum$  ハ  $u_i$  ガ正ナルモノ即チ  $0-\infty$  間ノモノノ全部ヲ  
トレルガ正負ノアラユル速度ノモノヲ探レル  $\sum_{-\infty}^{+\infty} \nu_i m u_i^2$   
ノ  $\frac{1}{2}$  ナリ、今  $u^2$  ノ平均値ヲ  $\overline{u^2}$ 、單位體積中ノ全分子數  
ヲ  $n$  トセバ

$$\sum_{-\infty}^{+\infty} \nu_i m u_i^2 = n m \overline{u^2}$$

$$\therefore p = \frac{2}{3} n m \overline{u^2}$$

而シテ分速度ハ各方向ニ於テ平均トシテ同ジ關係ニ

$2 \sum \nu_i m u_i^2 = \frac{2}{3} \sum \nu_i m u_i^2 = n m \overline{u^2}$

$p = \frac{2}{3} n m \overline{u^2}$

アルヲ以テ

$$\overline{u^2} = \overline{v^2} = \overline{w^2}$$

又明ニ

$$\overline{u^2} + \overline{v^2} + \overline{w^2} = \overline{c^2}$$

$$\therefore \rho = \frac{1}{3} nm \overline{c^2}$$

尙氣體ノ密度ヲ  $\rho$ 、一分子當リノ平均運動「エネルギー」ヲ  $\bar{k}$ 、單位體積ニツイテノ運動「エネルギー」ヲ  $K$  トセバ

$$\rho = nm \quad \bar{k} = \frac{1}{2} m \overline{c^2} \quad K = n \bar{k}$$

ナル故

$$\rho = \frac{1}{3} \rho \overline{c^2} \quad \text{或ハ} \quad \rho = \frac{2}{3} n \bar{k} = \frac{2}{3} K$$

即チ氣體ノ壓力ハ單位體積中ノ運動「エネルギー」ノ  $\frac{2}{3}$  ニ等シ、

### 八、溫度ト運動「エネルギー」、

溫度ハ物質運動論的ニハ分子ノ運動「エネルギー」ノ或ル Level ヲ意味セル事ハ前述ノ如シ、此ノ兩者ノ數量的關係ヲ見出スニハ溫度ガ關係セル實際ヨリ得ル式ト、理論ヨリ導キ得ル式トヲ比較セバ可ナリ、之ニ役立つモノハ熱的並ニ力學的ニ最モ簡單ナル性質ヲ有スル完全氣體ニ關スル法則ナリ、即チ完全氣體ニ於テ Boyle-Charles ノ法則ニ依レバ

$$\rho v = \rho T$$

(單位質量)

$$\rho V = RT$$

(一瓦分子)

ナリ、然ルニ

$$\rho V = \frac{2}{3} \sqrt{3} n \bar{k} = \frac{2}{3} N \bar{k}$$

$$\overline{u^2} = \overline{v^2} = \overline{w^2}$$

$$\overline{u^2} + \overline{v^2} + \overline{w^2} = \overline{c^2}$$

$$\overline{u^2} = \frac{1}{3} \overline{c^2}$$

$$\rho = n \cdot \sqrt{\frac{m}{M}} \quad \begin{array}{l} \text{number of molecules} \\ \text{mass of molecule} \end{array}$$

$$K = \frac{1}{2} m \overline{c^2} \quad \left[ \begin{array}{l} \text{dynamic energy} \\ = \frac{1}{2} m v^2 \end{array} \right]$$

$$K = \frac{1}{2} n m \overline{c^2} = n K$$

$$\therefore \rho = \frac{1}{3} \rho \overline{c^2} = \frac{2}{3} n K = \frac{2}{3} K$$

單位體積, energy,  $\frac{2}{3}$

之ヨリ

$$pV = \frac{2}{3} N \bar{k}$$

$$\therefore \bar{k} = \frac{1}{2} m \bar{c}^2 = \frac{3}{2} \frac{R}{N} T = \frac{3}{2} kT$$

茲ニ  $k = \frac{R}{N}$  ニシテ之ハ分子一粒ニ就イテノ氣體常數ニシテ **Boltzmann** ノ常數ト稱ス、而シテ其ノ値ハ

$$R = 8.314 \times 10^7 \frac{\text{ergs}}{\text{deg}} \quad (\text{絶對單位})$$

ナルヲ以テ

$$k = \frac{8.314 \times 10^7}{6.06 \times 10^{23}} = 1.38 \times 10^{-16} \frac{\text{ergs}}{\text{deg}}$$

ナリ、之ニ依リ溫度トハ一分子當リノ平均運動「エネルギー」ノ  $\frac{2}{3}k$  倍ヲ意味スル量、逆ニ云ヘバ一分子當リノ平均運動「エネルギー」ハ溫度ノ  $\frac{3}{2}k$  倍ナルヲ示スモノナリ、 $k$  ハ普遍常數ナルヲ以テ溫度一定ナル限リ一分子當リノ平均運動「エネルギー」ハ總テノ氣體ニ就キ一定ナルヲ示ス、尙又  $T = 0$  ナル溫度即チ絶對零度ハ運動「エネルギー」ガ零トナル状態即チ分子ノ靜止状態ヲ意味ス、之溫度ニ或最下限度ヲ考慮シ得ル所ナリ、

**Boyle, Charles, Avogadro** ノ諸法則逆誘導、今最初ニ溫度  $T$  ガ分子ノ平均運動「エネルギー」 $\bar{k}$  ニ比例セルモノト假定セバ溫度ガ一定ナル以上  $pV = \text{常數}$  トナリ **Boyle** ノ法則ヲ示シ、又  $\bar{k}$  ト  $T$  ガ比例スル以上  $pV$  ハ溫度  $T$  ニ比例スベク、 $p$  ガ一定ナラバ  $V$  ハ  $T$  ニ比例スル事トナリ、之 **Charles** ノ法則ニ外ナラズ、又  $k$  ヲ普遍常數ト認ムルナラバ  $pV = NkT = \text{於テ } p, V, T \text{ 一定ナルヲ以テ } N \text{ 一定トナル、即チ Avogadro ノ法則ヲ示ス、}$

〔例題〕 標準状態ニ於ケル空氣 1 立方米ノ重量ハ 1.293 斤ナリ、此ノ時ノ比氣體常數  $r$  フ重力單位ニテ求ム、

解、標準状態ナルヲ以テ

$$p_0 = 1.033 \times 10^4 \frac{\text{kg}}{\text{m}^2} \quad T_0 = 273^\circ$$

$$\therefore r = \frac{p_0 v_0}{T_0} = \frac{1.033 \times 10^4}{1.293 \times 273} = 29.27 \frac{\text{kg-m}}{\text{kg}}$$

### 練習問題

1. 容量 2.8 立方米ノ氣蓄器ニ 150 氣壓ノ空氣ヲ裝氣セシニ其ノ温度攝氏  $38^\circ$  ナリシト、裝氣セシ重量幾何ナリヤ、

2. 容量 1.2 立方米ノ氣蓄器ニ攝氏  $16^\circ$  ノ空氣ヲ充實シアリ、今壓力ヲ變化セシメズシテ攝氏  $93^\circ$  ニ熱スルトキハ幾何體積ノ空氣逃出スルヤ、

3. 壓力  $1.05 \frac{\text{斤}}{\text{平方糎}}$  ニシテ攝氏  $16^\circ$  ノ空氣ヲ 160 立方米ノ氣蓄器ニ充タサンニハ幾斤ヲ要スルヤ、

4. 攝氏零度 1 氣壓ノ氣體ノ 1 立方糎當リ 1 瓦分子當リ及 1 分子當リノ運動「エネルギー」ヲ概算セヨ、但シ Avogadro 數  $= 6 \times 10^{23} \text{ mol}^{-1}$ 、攝氏零度 1 氣壓ノ 1 瓦分子ノ體積  $= 22.4 \times 10^3 \text{ cm}^3$  フ既知トス、

## 九、内部「エネルギー」及狀態方程式、

或系ノ内部「エネルギー」ハ氣體運動論的ニハ總テ或力學的「エネルギー」ニ歸スベク、之ヲ分クレバ分子ノ運動「エネルギー」ト分子力ニ依ル位置「エネルギー」トヨリ

成ル、而シテ分子ノ運動「エネルギー」ニハ並進ノ運動「エネルギー」ト廻轉ノ運動「エネルギー」トニ分ケラル、之迄運動「エネルギー」トシテ述ベシ  $\bar{k} = \frac{1}{2} m \bar{c}^2 = \frac{3}{2} kT$  ハ勿論並進ノ運動「エネルギー」ヲ意味シ、此ノ外ニ廻轉ノ運動「エネルギー」或ハ位置「エネルギー」ヲ持ツナラバ一分子當リノ全「エネルギー」ハ  $\frac{3}{2} kT$  ヨリ多ク且温度  $T$  ニ比例スルトハ限ラザルナリ、即チ一般ニ或系ノ内部「エネルギー」 $U$  ハ必ズシモ温度ノミニ依リテ定マラズ、状態ヲ定ムル他ノ量即チ壓力  $p$ , 容積  $v$  ニ關係スベク、 $U$  ハ  $T$ ,  $p$ ,  $v$  ノ函數ト見ルベキナリ、即チ

$$U = f(T, p, v)$$

状態方程式、或系ノ状態ヲ決スル温度  $T$ , 壓力  $p$ , 容積  $v$  ハ各ガ自由ニ變ジ得ル量ニ非ズ、例ヘバ温度上昇ハ壓力或ハ容積ノ増加ヲ來タス如ク互ニ或ル關係ガアリ、物質ニ應ジ特殊ノ關係式ニテ結バル、即チ完全氣體ニ於テハ Boyle-Charles ノ法則、實在氣體ニ於テハ後述ノ如キ關係式アリ、又固體、液體ニテモ壓縮及熱膨脹ニ關係スル關係ニ依リ  $T$ ,  $p$ ,  $v$  ノ三者間ニハ各特殊ノ關係式アリ、カカル關係式ヲソノ系ノ状態方程式或ハ特性方程式ト稱ス、内部「エネルギー」ハ  $T$ ,  $p$ ,  $v$  ノ三變數デ定マリ  $T$ ,  $p$ ,  $v$  ハ互ニ此ノ特性方程式トシテ一ツノ關係式ニテ結バルルヲ以テ自由ニ變ジ得ル量即チ獨立變數ハ二ツニシテ次ノ様ニ表ハシ得ル、

$$U = f_1(T, p), \quad U = f_2(T, v), \quad U = f_3(p, v)$$

而シテ完全氣體ニ於テハ後述スルモ壓力及容積ノ變

化ニ拘ラズ其ノ内部「エネルギー」ハ温度ノミデ定マリ、  
一般ノ物質ニ於テモ壓力或ハ容積一定ノ場合即チ定  
壓變化或ハ定容變化ニ於テハ其ノ内部「エネルギー」ハ  
温度ノミニ依ル事勿論ナリ、

自由度、「エネルギー」均等配分則、或力學系ノ自由度  
トハ其ノ系ノ狀勢ヲ決定スルニ必要ナル自由ニ變ジ  
得ル變數ノ數ヲ云フ、從ツテ單原子完全氣體ニテハ1  
分子ノ運動ノ自由度ハ3ナリ、故ニ單原子完全氣體ノ  
分子ノ1自由度ニ屬スル「エネルギー」ハ氣體ノ種類ニ  
依ラズ常ニ  $\frac{1}{2}kT$  ナル事ヲ豫想シ得ルナリ、一般ニ統計  
力學上ヨリ Boltzmann 氏ハ或系(粒子群)ガ温度  $T$  ニ於  
テ熱力學的平衡狀態ニ在ルトキ其ノ系ノ各1自由度  
ニ對スル運動「エネルギー」トシテ  $\frac{1}{2}kT$  ツツ均等ニ配分  
サル事ヲ見出セリ、之ヲ「エネルギー」均等配分則ト稱ス、  
從ツテ  $N$  個ノ粒子ヨル成ル系ニ於テ各一粒子ノ自由  
度ガ  $f$  ナル時ハ此ノ系ノ全運動「エネルギー」 $K$  ハ

$$K = \frac{f}{2} NkT = \frac{f}{2} RT$$

ナリ、

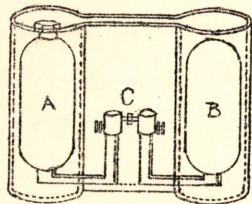
### 一〇、Joule ノ 實驗 及 Joule-Thomson 効果、

氣體中ノ各分子ガ相互間ノ分子力ニ働カルルナラ  
バ其ノ容積(從ツテ壓力モ)ヲ變化セルトキ分子力ニ  
依ル位置「エネルギー」ノ増減ニ依リ温度等シクトモ其  
ノ内部「エネルギー」ヲ變化スベキナリ、氣體ガ此ノ性質  
ヲ有セリヤ否ヤニ就キ相當精密ナル實驗ハ先ヅ Joule



氏ニ依リテ行ハレタリ、

**Joule ノ實驗、** 其ノ要旨ハ圖示ノ裝置ニテ先ヅAニ



壓縮セル空氣ヲ充タシ、Bハ真空ニシテ全部ヲ同温ニシテ水熱量計中ニ置キ、次ニ活栓Cヲ開キテAノ空氣ヲB内ニ擴散セシメ、此ノ際ノ熱量計ノ溫度變化ヲ見タルニ熱量計ハ何等熱量ヲ授受セズ、溫度ハ一定ナル

結果ヲ得タリ、若シ内部ニテ分子力ガ効果的ニ働キシナラバ此ノ膨脹ニ於テ分子ヲ引離スベキ内部仕事ヲ要シ、之ダケノ分子力ニ依ル位置「エネルギー」ヲ増加スベキニ依リ、外部ヨリノ熱ノ流入カ或ハ運動「エネルギー」ノ消費ニ依リ溫度ノ低下アルベキナリ、然ルニ上述ノ如ク熱ノ流入モナク溫度ヲ不變ニ保チ得ル事ハ分子力ノ効果微弱ニシテ之ニヨル位置「エネルギー」ハ容積變化ニ無關係ナル事、即チ其ノ内部「エネルギー」ハ容積ニ無關係ニシテ溫度ノミニ依ル事ヲ意味セルモノナリ、

**Joule-Thomson ノ細孔栓實驗、** Joule 氏ノ實驗ニテハ溫度測定ニ使用セル水熱量計ハ熱容量大ニシテ微小溫度變化ヲ示シ得ザルヲ以テ、ソノ結果ハ近似的ニノミ意味ヲ有スルモノナリ、從ツテ一層嚴密ニ上記ノ關係ヲ見出サントシテ Joule ト W. Thomson (Lord Kelvin) トハ氣體ヲ低壓ノ部分へ細孔栓ヲ通り脹膨セシメ其ノ溫度



變化ヲ精密ニ測定スル實驗ヲ行ヘリ、ソレニ依リ氣體ハ噴出膨脹ニ依リ冷却スル事ヲ見出セリ、之即チ此ノ溫度低下ハ分子力ニ依ル位置「エネルギー」ノ増加ニ依ルモノナリ、此ノ現象ヲ Joule-Thomson 効果ト稱シ、溫度低下<sup>0</sup> 兩壓力ヲ夫々  $p_1, p_2$  トシソノ間ノ關係ヲ表ス、實驗式トシテ

$$t = n(p_2 - p_1) \left( \frac{273}{T} \right)^2$$

ヲ得タリ、茲ニ  $n$  ノ値ハ  $p$  ニ氣壓ヲ單位ト取ルトキ空氣ニ於テ 0.276, 炭酸瓦斯ニ於テ 1.37 ヲ見出セリ、即チ空氣ニ於テハ攝氏零度ニ於テ壓力差 1 氣壓ニテ噴出膨脹ノ際 0.276° ノ溫度低下ヲ來タスヲ示ス、

完全氣體ノ内部「エネルギー」、實在ノ氣體ニハ上述ノ如ク總テ Joule-Thomson 効果ガ存在シ、初メノ Joule ノ實驗ガ示セル結果ハ近似的ノモノナルガ、若シ氣體ノ各分子ガ全ク分子力ノ効果ヲ受ケヌモノト假定セバ位置「エネルギー」モ全ク不變ニシテソノ内部「エネルギー」ハ運動「エネルギー」從ツテ溫度ノミニテ決リ、容積壓力ニハ無關係ナルベキナリ、水素、「ヘリウム」ノ如キ臨界溫度低キ氣體ハ略此ノ性質ヲ具備セリ、此ノ假定的關係ヲ普通 Joule ノ法則ト呼ビ、完全氣體ハ此ノ性質ヲ有スルモノトス、從ツテ其ノ内部「エネルギー」 $U$  ハ溫度  $T$  ノミノ函數ナリ、即チ

$$U = f(T)$$



## 一一、實在氣體ノ狀態方程式、

完全氣體ノ狀態方程式タル Boyle-Charles ノ法則  $pV = RT$  ハ實在氣體ニ對シテハ完全ニハ適合セズ、此ノ關係ハ氣體運動論的ニ既ニ述ベタル如ク壓力ト運動「エネルギー」ノ關係、並ニ溫度ガ運動「エネルギー」ニ比例ストイフ事ヨリ誘導サルルモノナルガ、Van der Waals ハ分子ノ大サ及分子力ヲ考慮スル事ニ依リ

$$\left(p + \frac{a}{V^2}\right)(V - b) = RT$$

ナル狀態方程式ヲ導キタリ、之所謂 Van der Waals ノ狀態方程式ニシテ式中ノ  $a, b$  ハ各氣體特有ノ常數ナリ、

分子ノ大キサノ考慮、氣體ノ分子ハ或大キサヲ有スルヲ以テ分子ガ自由ニ運動シ得ル空間減少ス、從ツテ  $V$  ノ代リニ  $V - b$  ヲ取ルベキナリ、

分子力ノ考慮、氣體分子間ノ引力ハ壓力ヲ減少スル結果ヲ來スベシ、即チ器壁ノ近傍ニ在ル分子ハ氣體ノ内部ノ方ニ引カレ、從ツテソレガ壁ニ衝突スル際壁ニ與フル運動量ヲ減少スベシ、此ノ壓力ノ減少ハ衝突ノ回数並ニ衝突セントスル分子ヲ氣體ノ内部ニ引入レントスル分子ノ數ニ比例ス、故ニ氣體ノ密度ノ自乗ニ正比例、或ハ容積  $v$  ノ自乗ニ反比例セザル可カラズ、即チ此ノ壓力ノ減少ハ  $\frac{a}{V^2}$  ニ依リテ表スヲ得ベシ、從ツテ上記二原因ヨリ壓力  $p$  ハ  $\frac{RT}{V}$  ノ代リニ

$$p = \frac{RT}{V - b} - \frac{a}{V^2}$$

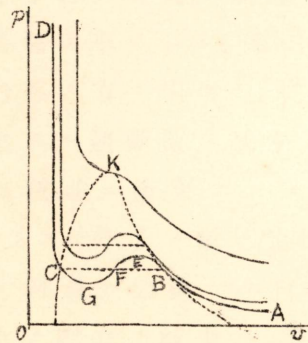
トナリ Van der Waals ノ状態方程式ヲ得ルナリ、上ノ誘導ニ依リ明ナル如ク  $a$  ハ分子力ニ關スル常數、 $b$  ハ分子ノ大キサニ關スル常數ナルガ、氣體ガ非常ニ稀薄ナル場合即チ  $V$  ガ大ナル場合ハ共ニ  $V$  ニ對シテ無視シ得ルヲ以テ  $pV = RT$  即チ Boyle-Charles ノ法則ト一致シ、稀薄ナラズトモ溫度及壓力ガ大ナル場合ハ  $\frac{a}{V^2}$  ハ  $p$  ニ對シテ省畧出來  $p(V-b)$  トナリ、等溫線ハ Boyle ノ法則ト同種ノ正雙曲線ナリ、

等溫線ト臨界點、 $V, p$  ヲ二軸ニ採リ上式ニ依リ種々ノ溫度ニ對スル等溫線ヲ描ケバ圖示ノ如シ、今之ヲ説明センニ上式ヲ書キ直サバ

$$V^3 - \left(b + \frac{RT}{p}\right)V^2 + \frac{a}{p}V - \frac{ab}{p} = 0$$

トナリ、 $T$  ガ一定ナル時  $p$  ノ與ヘラレタル値ニ對スル

$V$  ノ値ヲ求ムル式ガ三次方程式トナル、從ツテ三根ガ悉ク實數ナルカ、或ハ一根ガ實數ニシテ二根ガ虛數ナルカナリ、今 CFB 線ヲ與ヘラレタル溫度  $T$  ニ於ケル飽和蒸氣ノ壓力ヲ表ス直線ナリトス、先ヅ與ヘラレ



タル物質ノ蒸氣ヲトリ、ソノ溫度ヲ一定ニナシ置キ漸次壓縮セバ其ノ間ノ等溫線ハ曲線  $AB$  ニ依リ表ハスヲ得ベク、 $B$  點ニ於テ蒸氣ハ飽和スルナリ、然レドモ蒸氣

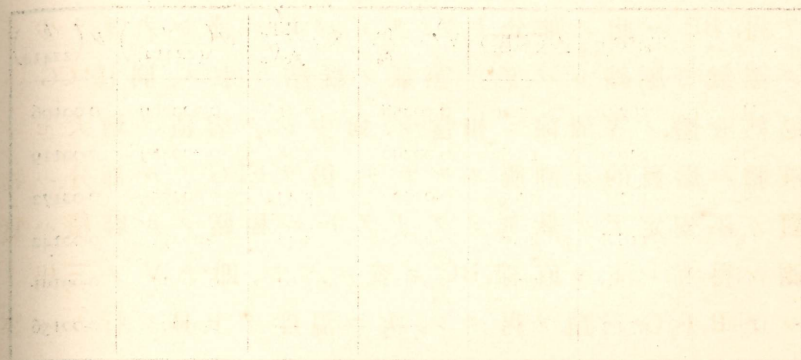
内ニ塵埃其ノ他蒸氣外ノ物質ナキモノトセバ、蒸氣ノ容積ヲ減少スルモ蒸氣ハ尙凝結スル事ナカラシムルヲ得、BEハ此ノ部分ナリ、サレバEニ達シテヨリ少シク蒸氣ヲ壓縮セバ、急ニ蒸氣ノ凝結ヲ來ス、同様CGハ過熱液體ノ等溫線ニ相當シ、尙少シク容積ヲ増大セバ液體ハ爆發的ニ沸騰スルナリ、仍テEFGナル部分ハ物質ガ不安定ナル状態ニアリテFニ相當スル容積ハ實測シ得ザレドモ直線BCニ交ルベシ、即チVノ三根トシテB,F,G三點ヲ得ベシ、次ニ温度ヲ上昇シ行カバ等溫線ハK點ヲ通過スベシ、之即チ臨界温度等溫線ニ於テ三點ガ一點Kニ於テ一致ス、數學的ニハ三根ノ等根ナル場合ナリ、而シテK點ハ、曲線ノ勾配零ニシテ、且彎曲點ナルヲ以テ

$$\frac{\partial p}{\partial V} = 0, \quad \frac{\partial^2 p}{\partial V^2} = 0$$

ヲ満足スル點トシテ求メラレ容易ニV, p, Tノ値トシテ

$$V_c = 3b, \quad p_c = \frac{a}{27b^2}, \quad T_c = \frac{1}{R} \frac{8a}{27b}$$

ヲ得、之等ヲ夫々臨界容積、臨界壓力、臨界温度ト稱ス、尙上式ヨリ $\alpha, b$ ヲ消去セバ $\frac{RT_c}{p_c V_c} \equiv K = \frac{8}{3} = 2.67$ ナル關係が見出サル、此ノ値ハ普遍常數ナルガ $T_c, p_c, V_c$ ノ實測値ヨリノKノ値ハ後段ニ表示スル如ク之ト相當ノ懸隔アリ、之ヨリ見テVan der Waalsノ式ガ臨界點ヲ表ハスニ非常ニヨク合致スルトハ言ヒ得ザレドモ、此ノ考へ方ニヨリ諸種ノ説明ヲナシ得ル事ハ面白キ事ナリ、尙此ノ外實在氣體ノ状態方程式トシテ數多ノ式ガ導カレ居ルモ茲ニハ畧ス、



[備考]  $a, b, V_c'$  は  $0^\circ\text{C}$ . 1 氣壓ニ於テ  $1\text{cm}^3$  ナ占ムル量ニ就イテノモノナリ、

	$T_c(^{\circ}\text{C})$	$p_c$ (氣壓)	$V_c' = \frac{p_c}{p_0}$	$K = \frac{RT_c}{p_c V_c}$	$a' \left( \frac{a}{(22414)^2} \right)$	$b' \left( \frac{b}{22414} \right)$
$\text{H}_c$	-267.9	2.26	0.00258	3.31	0.000069	0.00106
$\text{H}_2$	-239.9	12.8	0.00290	3.28	0.000489	0.00119
$\text{N}_2$	-147.1	33.5	0.00402	3.43	0.00275	0.00172
$\text{O}_2$	-118.8	49.7	0.00332	3.42	0.00271	0.00142
$\text{CO}_2$	31.0	72.9	0.00422	3.62	0.00717	0.00191
$\text{H}_2\text{O}$	374.2	217.5	—	—	0.0109	0.00136

## 一二、氣體ノ比熱、

或物質ノ單位質量ガ熱量  $dQ$  ヲ得テ温度上昇  $dT$  ヲ來シタリトセバソノ物質ノ比熱  $c$  ハソノ物質ノ單位質量ヲ温度  $1^\circ$  高ムルニ要スル熱量ナルヲ以テ

$$c = \frac{dQ}{dT}$$

ナリ、從ツテ第一法則ニ依リ

$$c = \frac{dU}{dT} + p \frac{dv}{dT}$$

即チ比熱トハ物質ノ單位質量ガ温度  $1^\circ$  上昇スル場合ノ内部「エネルギー」ノ増加ト外部へ爲ス仕事ノ和ヲ意味ス、

定容比熱、之ハ容積一定ニセル時ノ比熱ナルヲ以テ上式ニ於テ  $dv = 0$  ト置カバ

$$c_v = \left( \frac{\partial U}{\partial T} \right)_v$$

ニテ表ハサレ容積一定ノ場合ノ温度  $1^\circ$  ノ上昇ニ對ス

ル内部「エネルギー」ノ増加ヲ意味ス、

定壓比熱、之ハ壓力一定ノ場合ナルヲ以テ

$$c_p = \left(\frac{\partial U}{\partial T}\right)_p + p \left(\frac{\partial v}{\partial T}\right)_p$$

兩比熱ノ差、上ノ二式ヨリ

$$c_p - c_v = \left(\frac{\partial U}{\partial T}\right)_p - \left(\frac{\partial U}{\partial T}\right)_v + p \left(\frac{\partial v}{\partial T}\right)_p$$

即チ定壓比熱ハ定容比熱ヨリ溫度 1° ノ上昇ニ於ケル定壓ノ場合ト定容ノ場合トノ内部「エネルギー」ノ増加ノ差ト、膨脹ニヨル外部仕事ダケ大ナリ、

完全氣體ノ比熱、完全氣體ニ於テハソノ内部「エネルギー」ハ Joule ノ法則ニ依リ溫度ノミニテ定マリ  $p, v$  ニ無關係ナル故

$$c_v = \left(\frac{\partial U}{\partial T}\right)_v = \left(\frac{\partial U}{\partial T}\right)_p = \frac{dU}{dT}$$

從ツテ

$$c_p - c_v = p \left(\frac{\partial v}{\partial T}\right)_p$$

即チ兩比熱ノ差ハ膨脹ニ依ル外部仕事ノミナリ、而シテ完全氣體ノ狀態方程式ハ  $pv = rT$  ナルヲ以テ  $p$  一定ナルトキハ

$$p \left(\frac{\partial v}{\partial T}\right)_p = r$$

$$\therefore c_p - c_v = r$$

即チ比氣體常數  $r$  ハソノ氣體ノ單位質量ガ一定壓力ノ下ニ溫度 1° 上昇スル際膨脹ニ依リテ爲ス外部仕事ヲ意味シ、且ソノ定壓定容比熱ノ差ニ等シ、次ニ氣體ノ 1 瓦分子ヲ取リソレヲ溫度 1° ダケ高ムルニ要スル熱量即チ分子熱ヲ考フレバ

$$C_p - C_v = R$$

トナリ、定壓定容兩場合ニ於ケル分子熱ノ差ガ總テノ氣體ニ就キ一定ナル普通氣體常數  $R =$  等シ、之ハ完全氣體トシテ述ベタルモ實在氣體ノ  $C_p - C_v$  ノ實測値ヲ示サバ後段ノ表ノ如ク  $R$  ノ値即チ

$$R = 8.314 \times 10^7 \frac{\text{erg}}{\text{deg}} = 1.9865 \frac{\text{cal}}{\text{deg}}$$

ト畧一致ス、

[別証] 次ニ上述ノ關係ヲ他方面ヨリ示サン、今定壓ノ下ニ 1 瓦分子ノ完全氣體ノ溫度ヲ  $T_1$  ヨリ  $T_2$  ニ上昇セシムルニ必要ナル熱量ハ  $C_p(T_2 - T_1)$  ナリ、然ルニソノ一部分ハ  $p(V_2 - V_1) = R(T_2 - T_1)$  ノ外部仕事ヲナスヲ以テ内部「エネルギー」ノ増加ハ

$$C_p(T_2 - T_1) - R(T_2 - T_1) = (C_p - R)(T_2 - T_1)$$

ナリ、然ルニ一方  $T_1$  ヨリ  $T_2$  ニ上昇セル場合ノ内部「エネルギー」ノ増加ハ  $C_v(T_2 - T_1)$  ナルヲ以テ

$$(C_p - R)(T_2 - T_1) = C_v(T_2 - T_1)$$

$$\therefore C_p - C_v = R$$

ナリ、

分子運動ト比熱、今氣體ノ 1 瓦分子ヲ考ヘ其ノ内部「エネルギー」ヲ  $U$ 、(之迄ノ單位質量ノ場合ト區別スベシ) 分子ノ全運動「エネルギー」ヲ  $K$  トセバ、完全氣體ニテハ位置「エネルギー」不變ナルヲ以テ  $U$  ハ  $K$  ノ變化ニヨリテノミ變化シ  $dU = dK$  ナリ、從ツテ定容分子熱  $C_v$  ハ九節ノ關係ヲ用キ

$$C_v = \frac{dU}{dT} = \frac{dK}{dT} = \frac{f}{2}R$$

又定壓分子熱  $C_p$  ハ

$$C_p = C_v + R = \left(1 + \frac{f}{2}\right)R$$

故ニ兩比熱比  $\gamma$  ハ

$$\gamma = \frac{C_p}{C_v} = \frac{1 + \frac{f}{2}}{\frac{f}{2}} = 1 + \frac{2}{f}$$

ナリ、此ノ  $\gamma$  ノ値ヲ用フレバ、 $C_p, C_v$  ハ夫々

$$C_v = \frac{R}{\gamma - 1}, \quad C_p = \frac{\gamma R}{\gamma - 1}$$

ト書クヲ得ベシ、之等ノ關係式ニ於テ  $C_v, C_p$  及  $\gamma$  ハ共ニ分子  $f$  ノ自由度ガ不變ナル限リ溫度等ニ拘ラズ一定値ナリ、故ニ單原子氣體ノ場合ハ分子ヲ質點ト見レバ並進ノ自由度ノミデ  $f=3$  ナリ、從ツテ

$$C_v = \frac{3}{2}R = 2.98, \quad C_p = \frac{5}{2}R = 4.29, \quad \gamma = 1.667$$

トナリ、下表ニ示ス如ク  $H_2, Ar, N_2$  及蒸氣等ノ値ハ之ニ近ク、 $H_2, N_2, O_2, CO$  等ノ如ク二原子氣體(從ツテ空氣モ)ニ於テハ結合軸タル對稱軸ヲ除ク他ノ二軸ノ周リノ廻轉ノ自由度 2 ガ「エネルギー」配分ニ與リ並進ノ自由度 3 ト加ヘテ  $f=5$  トナルヲ以テ

$$C_v = \frac{5}{2}R = 4.97, \quad C_p = \frac{7}{2}R = 6.95, \quad \gamma = 1.400$$

トナリ畧表ト一致ス、

次ニ比熱ノ溫度變化ニ就キ Regnault 氏ハ實測ヲ行ヒシニ、氣體ノ定壓比熱ハ畧溫度ニ無關係ナルコトヲ見出シタリ、之ヲ Regnault ノ法則ト稱ス、然シ嚴密ニハ近似的ノモノニシテ、廣キ溫度範圍ニ於テハ大イニ隔離ス、然シ此處ニ完全氣體ニ於テハ定壓比熱ガ溫度ニ

無關係(從ッテ定容比熱モ温度ニ無關係)ナルモノト新ニ規約シ、此ノ性質ヲ完全氣體ノ一條件トス、

[備考] 單位ハ cal/deg  $C_p$  ハ  $C_p$  及  $\gamma$  ノ値ヨリ算出セルモノ、

氣體	分子量	$C_p = Mc_p$	$C_v = Mc_v$	$C_p - C_v$	$\gamma = C_p/C_v$
H <sub>e</sub>	4.002	$5.007 \left( \frac{5}{2}R \right)$	$3.018 \left( \frac{3}{2}R \right)$	1.989	$1.659 \left( 1 + \frac{2}{3} \right)$
A <sub>r</sub>	39.91	$4.997 (=4.97)$	$2.999 (=2.98)$	1.998	$1.666 (=1.667)$
H <sub>2</sub>	2.016	6.89 <sub>9</sub>	4.87 <sub>8</sub>	1.991	1.408
N <sub>2</sub>	28.02	$6.940 \left( \frac{7}{2}R \right)$	$4.643 \left( \frac{5}{2}R \right)$	1.997	$1.404 \left( 1 + \frac{2}{5} \right)$
O <sub>2</sub>	32.00	$6.989 (=6.95)$	$5.003 (=4.97)$	1.986	$1.397 (=1.400)$
CO	28.00	6.98 <sub>1</sub>	4.97 <sub>2</sub>	2.009	1.404
CO <sub>2</sub>	44.00	8.85 <sub>4</sub>	6.80 <sub>0</sub>	2.054	1.302
N <sub>2</sub> O	44.02	9.22 <sub>3</sub>	7.08 <sub>4</sub>	2.139	1.302

### 練習問題

- 標準状態ニ於ケル空氣ノ密度 0.00129, 定壓比熱 0.238,  $\gamma$  ヲ 1.41 トシテ熱ノ仕事當量ヲ求ム、
- 標準状態ニ於ケル酸素ノ定壓比熱 0.2175, 定容比熱 0.1556, 又 1 瓦分子ガ占ムル體積ヲ 22.4 立トシテ熱ノ仕事當量ヲ求ム、
- 空氣 1 疋ヲ 1 氣壓ノ下ニテ攝氏零度ヨリ 100° 迄熱スル時此ノ膨脹ニ際シテナセル外部仕事幾何ナルカ、但シ  $C_p = 0.238$ ,  $C_v = 0.169$  ナリトス、



### 一三、完全氣體ノ定義、

之迄述ベシ種々ノ性質ヲ一括シテ完全氣體ノ條件ヲ要約セバ、

- (1) Boyle-Charles ノ法則  $pV = rT$  ヲ満足スル事、
- (2) Joule ノ法則ノ満足、即チ内部「エネルギー」ガ溫度ノミニテ決ル事、
- (3) Regnault ノ法則ノ満足、即チ定壓比熱（從ツテ定容比熱モ）ガ溫度ニ無關係ナル事、

半完全氣體ノ定義、上ノ條件ハ理想的ノ場合ニシテ、熱機關研究ニ際シ實在氣體ヲ完全氣體ト看做シ得ザル場合多シ、カカル際ニハ次ノ如キ性質ヲ具備セルモノヲ近似的ニ用フ、即チ

- (1) Boyle-Charles ノ法則  $pV = rT$  ヲ満足スル事、
- (2)  $c_v$  ハ唯溫度ノミノ函數ナル事、即チ

$$c_v = a_v + bT + cT^2 + \dots$$

茲ニ  $a_v, b, c, \dots$  ハ常數、

- (3)  $c_p, c_v$  ハ溫度ニヨリ變化スルモ同一氣體ニツキソノ差ハ不變トス、即チ

$$c_p - c_v = r$$

カカル性質ヲ具備セルモノヲ半完全氣體ト稱ス、

### 一四、斷熱變化及等溫變化、

(Adiabatic change, Isothermal change)

或系ガ外部ト熱ノ授受ナクシテ状態ヲ變化スルト

キ斷熱變化ト云ヒ、溫度ヲ一定ニ保持シ變化スルトキ  
(一般ニ熱ノ授受行ハル)等溫變化ト云フ、

兩變化ニ於ケル外部仕事、氣體ガ外壓ニ逆ヒ膨脹  
スル際ハ外部仕事ヲナスモ、斷熱的ナルトキハ此ノ仕  
事ハ内部「エネルギー」ノ消費ニ依リテナサルヲ以テ、  
外部仕事ト當量ノ内部「エネルギー」ヲ失ヒ、從ツテ溫度  
低下シ、逆ニ斷熱壓縮ニ於テハ内部「エネルギー」ハ爲サ  
レタル外部仕事ト等量ダケ増シ溫度上昇ス、次ニ等溫  
度變化ニ於テハ内部「エネルギー」ハ溫度ノミニ依リ決  
ルヲ以テ當然不變デアリ、從ツテ等溫膨脹ニ於テハ外  
部仕事ト等量ノ熱ノ流入アリ、逆ニ等溫壓縮ニテハ流  
出アリ、

斷熱變化、斷熱變化ニテハ第一法則ニ於テ  $dQ = 0$   
ナルヲ以テ

$$dU + pdv = 0$$

然ルニ  $pv = rT$  即チ  $pdv + vdp = rdT$

及  $\frac{dU}{dT} = c_v$  從ツテ  $dU = c_v dT = \frac{c_v}{r}$

ナル關係アルヲ以テ之ヲ上式ニ代入セバ

$$\frac{c_v}{r}(pdv + vdp) + pdv = 0$$

$$\therefore \frac{dp}{p} + \left(1 + \frac{r}{c_v}\right) \frac{dv}{v} = 0$$

尙完全氣體ニテハ  $r = c_p - c_v$ ,  $1 + \frac{r}{c_v} = \frac{c_p}{c_v} = \gamma$  ナリ、

之ヲ上式ニ入レ積分セバ

$$\log_e p + \gamma \log_e v = \text{const.} \quad \text{或ハ} \quad \log_e pv^\gamma = \text{const.}$$

$$\therefore pv^\gamma = \text{const.}$$

之斷熱變化ニ於ケル壓力ト容積間ノ關係ヲ示ス式ナリ、尙此ノ式ト  $p v = r T$  トニ於テ  $p$  或ハ  $v$  ヲ消去セバ

$$T v^{\gamma-1} = \text{const} \quad \text{及} \quad T p^{\frac{1-\gamma}{\gamma}} = \text{const.}$$

ヲ得、之斷熱變化ニ於ケル溫度ト容積、及溫度ト壓力間ノ關係ヲ表ス、今氣體ガ (1) ノ狀態ヨリ (2) ノ狀態迄斷熱變化セリトセバ之等ノ式ハ夫々

$$p_1 v_1^{\gamma} = p_2 v_2^{\gamma}, \quad \frac{T_1}{T_2} = \left(\frac{v_2}{v_1}\right)^{\gamma-1}, \quad \frac{T_1}{T_2} = \left(\frac{p_2}{p_1}\right)^{\frac{1-\gamma}{\gamma}}$$

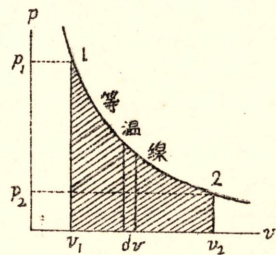
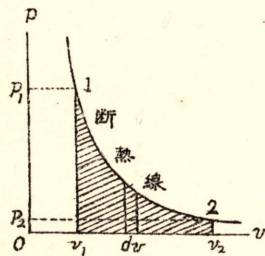
トナル、次ニ外部仕事ヲ求ムレバ

$$p dv = -dU = -c_v dT$$

ナルヲ以テ

$$\begin{aligned} W &= \int_1^2 p dv = - \int_{T_1}^{T_2} c_v dT = c_v (T_1 - T_2) \\ &= \frac{\gamma (T_1 - T_2)}{\gamma - 1} = \frac{p_1 v_1 - p_2 v_2}{\gamma - 1} = \frac{p_1 v_1}{\gamma - 1} \left\{ 1 - \left(\frac{v_1}{v_2}\right)^{\gamma-1} \right\} \end{aligned}$$

ナリ、今横軸ニ容積、縦軸ニ壓力ヲ採リ、壓力容積線圖ヲ描ケバ上述ノ積分ノ意味ハ圖示ノ影線ノ面積ヲ示ス、從ツテ此ノ面積ヲ測ル事ニヨリ仕事ノ量ヲ圖上ニ求ムルヲ得ルナリ、



一般ニ膨脹曲線ノ方程式ガ  $p v^n = \text{const}$  ナル時ハ同様ニシテ容易ニ

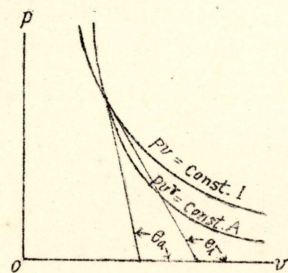
$$W = \frac{\gamma(T_1 - T_2)}{n - 1} = \frac{p_1 v_1 - p_2 v_2}{n - 1}$$

ナル事ヲ証明スルヲ得、

等温變化、等温變化ニ於テハ Boyle ノ法則ニ依リ  $p v = \text{const}$ . 故ニ其ノ膨脹曲線ハ正雙曲線ナリ、此ノ場合ノ外部仕事ヲ求ムレバ

$$W = \int_1^2 p dv = \gamma T \int_{v_1}^{v_2} \frac{dv}{v} = \gamma T \log_e \frac{v_2}{v_1}$$

ナリ、此ノ場合ノ仕事ノ量ハ前ト同様ニ圖示ノ影線ノ面積ナリ、尙等温變化ニ於テハ内部「エネルギー」Uハ不變ナル故此ノ際出入セル熱量 Q ハ此ノ外部仕事ニ等シ、



此ノ兩變化ニ於テ壓力、容積間ノ關係ヲ比較シ、等温線ト斷熱線ノ勾配ヲ考フルニ

$$\text{等温: } \tan \theta_i = \left( \frac{dp}{dv} \right)_i = -\frac{p}{v}$$

$$\text{斷熱: } \tan \theta_a = \left( \frac{dp}{dv} \right)_a = -\gamma \frac{p}{v}$$

$\gamma > 1$  ナルヲ以テ

$$\left| \left( \frac{dp}{dv} \right)_a \right| > \left| \left( \frac{dp}{dv} \right)_i \right|$$

$$\therefore \theta_a < \theta_i$$

例題 1. 壓力計ニテ壓力 4.22 砵/平方糎ニシテ體積 2 立方米ノ空氣アリ、之ヲ斷熱的ニ體積 5 立方米迄膨脹セシムルトキノ仕事ノ量ヲ求ム、

解、普通、工業上ニ用フル壓力計ハ開管壓力計ナル

ヲ以テ、絶對壓力ハ之ニ大氣壓ヲ加ヘザル可カラズ、從  
ツテ上式ニヨリ

$$W = \frac{(4.22 + 1.033) \times 10^4 \times 2 \left\{ 1 - \left( \frac{2}{5} \right)^{1.400-1} \right\}}{1.400 - 1}$$

$$= 80600 \text{ kg.-m.}$$

例題 2. 直徑 6 糎ノ圓筒アリ、此ノ内ニ筒頂ヨリ 1 糎  
ノ所ニ吸鑿ヲ置キ、攝氏 20°, 3 氣壓ノ空氣ヲ充タシ等溫  
ニシテ 3 倍ニ膨脹セシムルトキ吸鑿ニ與フル仕事ノ  
量如何、

解、

$$p_1 = 3 \times 1.033 \times 10^4 \text{ kg/m}^2$$

$$v_1 = 3.1416 \times 3^2 \times 1 \text{ cm}^3 = \frac{3.1411 \times 9}{10^6} \text{ m}^3$$

$$\frac{v_2}{v_1} = 3 \quad \therefore \log_e \frac{v_2}{v_1} = 1.0986$$

$$\therefore W = 3.099 \times 10^4 \times 3.1416 \times 9$$

$$\times 10^{-6} \times 1.0986 = 0.963 \text{ kg.-m.}$$

### 練習問題

1. 壓力計ニテ壓力 4.2 疋/平方糎ニシテ容積 0.085 立方  
米ノ完全氣體アリ、溫度ヲ變化スル事ナク容積ヲ 0.2 立  
方米迄膨脹セシムルトキノ仕事ノ量ヲ求ム、

2. 完全氣體ノ斷熱變化ノ場合ニ於ケル體積彈性率  
ヲ求ム、

3. 直徑 0.6 米ノ圓筒アリ、此ノ内ニ筒頂ヨリ 0.3 米  
ノ所ニ吸鑿ヲ置キ、3 氣壓ノ空氣ヲ充タシタルアリ、今  
斷熱的ニ此ノ 3 倍ノ容積迄膨脹セシムルトキ、膨脹ノ  
終ノ壓力及其ノ間ニ吸鑿ニ與フル仕事ノ量如何、

4. 壓力計ニテ壓力 5.6 疋/平方糎、攝氏 10°, 0.6 立方米ノ

空氣アリ、今之ヲ壓力 4.2 呎/平方呎 迄斷熱膨脹セルトキ  
ノ溫度及外部仕事ヲ問フ、

5. 吸鑊ヲ具フル圓筒ガ攝氏零度ノ氷ノ中ニ埋レル  
アリ、最初圓筒内ニ 1 氣壓ノ空氣アリ、之ヲ徐々ニ壓縮  
シテ 10 氣壓トセバ周圍ノ氷ハ幾何溶解セリヤ、但シ圓  
筒ノ半徑 7 呎、最初ノ空氣柱ノ長サ 20 呎トス、

6. 攝氏零度ノ空氣 1 呎アリ、其ノ壓力ヲ變化スルコ  
トナク容積ヲ倍加セリト、然ラバ終ノ溫度幾何ナリヤ、  
又問フ此ノ膨脹中ノ外部仕事量及與ヘラレタル熱量  
如何、

7. 絕對壓力 1.4 呎/平方呎 攝氏 15°, 1 呎ノ氣體ガ圓筒内  
ニ 0.61 立方米ノ容積ヲ占ム、今之ニ 24「キロカロリー」ノ  
熱量ヲ壓力一定ニシテ與ヘシニ攝氏 92°ニ昇レリ、然ラ  
バ外部仕事及内部「エネルギー」ノ増加如何、又定容比熱  
ヲ求ム、

8. 絕對壓力 14.7 呎/平方呎、攝氏零度、容積 1 立方呎ノ或  
氣體ノ重量ハ 0.0893 呎ナリ、今此ノ氣體ノ 1 呎ニツキ  
テノ定容比熱ヲ 0.0704「キロカロリー」トセルトキ  $\gamma$  ノ値  
ヲ求ム、

9. 容積  $v_1$ 、壓力  $p_1$  ナル單位質量ノ完全氣體アリ、今  
ソノ容積ガ各瞬時ニ於テソノ壓力ニ正比例シテ膨脹  
スルモノトス、若シソノ壓力ガ  $p$  ヨリ  $p + dp$  ニ變化セ  
ルトキ  $dU$  及  $dQ$  ヲ  $p$  ト  $dp$  ノ項ニテ表セ、

10. 攝氏 273°, 1 呎ノ乾燥空氣ガ圓筒内ニアリ、今此  
ノ空氣ガ斷熱的 ( $\gamma = 1.400$ ) ニソノ始メノ容積ノ 5 倍ニ

膨脹シ、次ニ等溫的ニ始メノ容積迄壓縮ス、之ニ更ニ熱ヲ與ヘテ等容積ノ儘元ニ戻ラシム、此ノ時ノ仕事ノ量及受熱、放熱量ヲ求ム、

熱 = 功 = 文、  
膨脹功 = 功 = 文、  
壓縮功 = 功 = 文、  
受熱 = 功 = 文、  
放熱 = 功 = 文、

## 第二章

### 熱力學第二法則

#### 一五、可逆變化及非可逆變化、

(Reversible change, Irreversible change)

或系ノ状態變化ニ於テ何ラカノ方法ニ依リソノ系モソノ變化ニ關與セル周圍ノ總テモ完全ニ最初通リノ状態ニ還シ得ルナラバ此ノ變化ヲ可逆變化ト稱シ、如何ナル方法ニ依ルモ始メノ状態ニ還ス事ノ出事ヌ變化ヲ非可逆變化ト稱ス、

非可逆變化ノ例、現實ノ自然現象ニハ嚴密ナル可逆變化ハ存在セズ、凡テ非可逆ナルガ其ノ顯著ナル例トシテハ

- (i) 摩擦ニ依リ力學的「エネルギー」ガ熱トナル變化、
- (ii) 傳導ニ依リ熱ガ高温體ヨリ低温體ニ移ル變化、
- (iii) 氣體ガ真空部或ハ低壓部ニ不均衡ニ自由膨脹スル變化、

等ナリ、カカル現象ガ非可逆ナルコトハ先驗的ナル或ル理論ヨリ其ノ理由ヲ結論シ得ルモノデナク、動カシ得ヌ經驗的事實ナリ、

[注意] 非可逆トハ前ノ變化過程ヲ其ノ儘直接逆行



シ得ズトイフ意味デナク、自然、能力、人力ノ限リヲ盡シ如何ナル方法ヲ用ヒテモ全部(考慮ノ系ノミナラズ外部ノ總テ)ニ就イテノ最初ノ状態ヲ再現シ得ズトイフ意味ナリ、例ヘバ摩擦ニ依ル熱發生ガ非可逆ナリトハ直接逆ニ物體ガ發生セル熱ヲ再ビ吸收サセ、元ノ速度ニテ動キ出サセ得スト云フ意味デナク、種々ノ手段例ヘバ發生セル熱ヲ採リ或ル方法ニテ先ヅ物體ノ溫度ヲ元通リニスルト共ニ、取リシ熱量ヲ適當ナル方法ニテ純粹ノ力學的「エネルギー」ニ變へ、之ヲ物體ニ與へ速度ヲ元通リニスルトイフ手段ヲ用ヒテモ、ソレハ不可能(二物體ノミ原狀ニ還シ得テモ他ノ部分ニ必ズ變化ヲ伴フ)ナリトイフ意味ナリ、

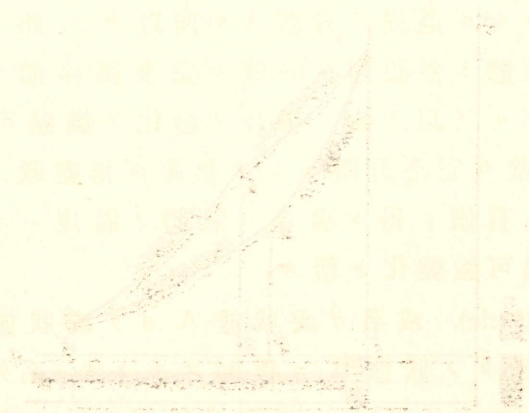
可逆變化ノ例、熱的現象ノ全然加ハラヌ粹力學的ナル變化ハ可逆ナリト考フルヲ得、例ヘバ摩擦、傳導、空氣ノ流れ等ヲ絶對的ニ伴ハスト考フル一物體ノ或運動、或ハ絶對的ニ變形セザル連結棒ヤ革帶、摩擦絶無ノ軸受、接手ヨリナル剛體ノ機械ノ純力學的ナル運轉等ハ自己及外部ニ何等ノ變化ナクシテ原狀ニ還リ得ル、カカルモノハ可逆ナリト考へ得ル、

準靜的過程 (Quasi-static process). 物體ノ状態ヲ變化セシムル際ノ過程ガ物體ヲ平衡状態ニ無限ニ近ク置キタル儘ニテ行ハルル時、此ノ過程ヲ準靜的過程ト稱ス、例ヲ舉ゲテ説明セバ熱平衡ニアル氣體ハソノ器壁ニ一定ノ壓力 $p$ ヲ及ボス、此ノ器ニハ吸鑿ヲ具ヘ氣體ヲ逃ガス事ナク動キ氣體ノ容積ヲ變へ得ル様ニナレリ

トス、今氣體ノ容積ヲ小ニセントメニハ吸鑄ニ氣體ノ  
壓力ヨリ大ナル壓力 $P$ ヲ加ヘザル可カラズ、 $P$ ヲ非常  
ニ大ニトリ容器ノ容積ヲ小ニスルトキハ氣體ハ運動「エネ  
ルギー」ヲ得、複雑ナル運動状態ニ置カル、之ニ反シテ $P$   
ト $P$ トノ差ヲ極メテ小ニトリ、無限ニ遅キ速度ニテ吸  
鑄ヲ動カス時ハ、氣體ハ各瞬時ニ殆ド平衡ノ儘ニテ壓  
縮サル、此ノ後者ノ過程ガ即チ準靜的過程ナリ、熱ノ移  
動ニ關シテモ同様ニシテ熱平衡ニアル物體ニソノ溫  
度ヨリ極メテ僅カ高キ溫度ノ物體ヲ接觸セムルシ事  
ニヨリ、始メノ物體ノ熱平衡ニ差シタル變動ヲ起ス事  
ナク任意ノ溫度ヲ得シムル事ヲ得、從ツテ此ノ過程ハ  
可逆ニシテ熱ガ關聯セル可逆變化トシテノ理想例ナ  
リ、但シ此ノ過程ハ物體ニ有限ノ變化ヲ起サシムルニ  
極メテ長キ時間ヲ要ス、然シ我々ノ理論的考察ニ於テ  
ハ時間ノ長短ヲ問題ニスルヲ要セズ、之理論的研究ニ  
際シテカカル過程ヲ考慮スル所以ナリ、此ノ變化過程  
ニ於テ氣體ト熱源間ノ隔壁ガ完全絶縁體ナラバ熱ヲ  
授受セザルヲ以テ此ノ場合ノ變化ヲ斷熱可逆變化ト  
稱シ、隔壁ガ完全導體ニシテ熱源ガ無盡藏ノ熱容量ヲ  
有スルト看做シ得ル場合ハ氣體ノ溫度ハ不變ニシテ  
之ヲ等溫可逆變化ト稱ス、

輪廻 (Cycle). 或系ガ或状態 A ヨリ或状態變化ヲナ  
シ、再ビ始メノ状態 A ニ復歸スルトキ (系外ノモノハ  
變化ストモ可ナリ) コノ過程ヲ輪廻ト云フ、輪廻ガ可逆  
的ナルトキ、即チ系ガ元ニ還ルト共ニ系外ノ總テモ原

然ルニ我々ノ理論的考察ニ於テハ時間ノ長短ヲ問題ニスルヲ要セズ、之理論的研究ニ際シテカカル過程ヲ考慮スル所以ナリ、此ノ變化過程ニ於テ氣體ト熱源間ノ隔壁ガ完全絶縁體ナラバ熱ヲ授受セザルヲ以テ此ノ場合ノ變化ヲ斷熱可逆變化ト稱シ、隔壁ガ完全導體ニシテ熱源ガ無盡藏ノ熱容量ヲ有スルト看做シ得ル場合ハ氣體ノ溫度ハ不變ニシテ之ヲ等溫可逆變化ト稱ス、

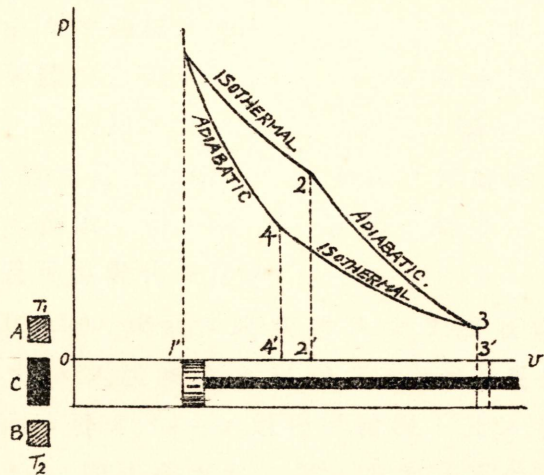


狀ニ還リ得ルナラバ此ノ輪廻ヲ可逆輪廻ト稱ス、

### 一六、熱機關及 Carnot 輪廻、

熱機關トハ熱ヲ仕事ニ變ズル裝置ニシテ、實際ノ熱機關ハ週期的ニ最初ノ状態ニ歸ル動作ノ連續的輪廻ヲナシテ働クモノナリ、而シテ操作物質ニ依リテ或高溫度熱源(單ニ熱源トモ云フ)ヨリ熱ヲ受ケソノ容積變化ヲ利用シテ一部分ヲ仕事ニ轉換シ、殘餘ノ熱ヲ低溫度熱源(冷却器トモ云フ)ニ放出スルモノナリ、復水式蒸氣機關ノ兩熱源ハ夫々爐及復水器ナリ、罐ハ機關ノ一部ニシテ爐ナル熱源ヨリ熱ヲ受クルモノニシテ蒸氣ハソノ操作物質ナリ、内火機關ニ於テハ熱ヲ内部發火ニ依リ採リ、氣體ノ容積變化ニヨリ仕事ヲ爲ス、

Carnot 輪廻、Carnot 氏ハ一組ノ等溫線及斷熱線ヨリ成ル特殊ノ熱機關ヲ考案セリ、此ノ機關ハ完全ニ熱ノ



不良導體ナル筒内ニ滑動ニ際シ少シモ摩擦ナキ吸鏝ヲ有シ、此ノ吸鏝モ亦完全ニ熱ノ不良導體ナリトス、之ニ反シ筒ノ頂部ノミハ熱ノ良導體ニシテ、必要ニ應ジ之ヲ遮斷シ得ル蓋Cナル熱ノ不良導體ヲ別ニ裝備セルモノナリ、A, Bハ夫々熱源及冷却器ニシテ之等ハ其ノ容量無限ニシテ、一定量ノ熱ヲ之ニ與ヘ又之ヨリ取ルモ、ソノ爲ニ溫度ノ昇降ヲ生ズルガ如キ事ナキモノトシ、且Aハ高溫度 $T_1$ ニシテ、Bハ低溫度 $T_2$ ヲ有スルモノト假定ス、而シテ操作物質トシテ完全氣體ヲ用ヒソノ全過程ハ準靜的ニシテ次ノ四過程ヨリナレリ、

第一過程：(可逆的) 等溫膨脹  $[T_1, v_1, p_1 \xrightarrow{+Q_1(\text{吸收})} T_1, v_2, p_2]$

第二過程：(可逆的) 斷熱膨脹  $[T_1, v_2, p_2 \longrightarrow T_2, v_3, p_3]$

第三過程：(可逆的) 等溫壓縮  $[T_2, v_3, p_3 \xrightarrow{+Q_2(\text{放出})} T_2, v_4, p_4]$

第四過程：(可逆的) 斷熱壓縮  $[T_2, v_4, p_4 \longrightarrow T_1, v_1, p_1]$

單位質量ノ完全氣體ガ此ノ輪廻ニ於テナス外部仕事ハ第14節ニ述ベタル事ニヨリ、

$$\text{第一過程： } W_1 = rT_1 \log_e \frac{v_2}{v_1} = Q_1$$

$$\text{第二過程： } W_2 = U_1 - U_2$$

$$\text{第三過程： } W_3 = rT_2 \log_e \frac{v_4}{v_3} = -Q_2$$

$$\text{第四過程： } W_4 = U_2 - U_1$$

茲ニ $Q_1$ ハ第一過程ニテ熱源ヨリ吸収セル熱量、 $Q_2$ ハ第三過程ニテ冷却器ニ放出セル熱量、 $U_1, U_2$ ハ夫々 $T_1, T_2$ ニ於ケル内部「エネルギー」ナリ、然ルニ第二及第四ノ斷熱變化ニ於テ

$$T_1 v_2^{\gamma-1} = T_2 v_3^{\gamma-1}, T_2 v_4^{\gamma-1} = T_1 v_1^{\gamma-1}$$

$$\therefore \frac{v_2}{v_1} = \frac{v_3}{v_4}$$

從ツテ

$$\frac{Q_1}{T_1} = \frac{Q_2}{T_2} = \frac{Q_1 - Q_2}{T_1 - T_2} = \frac{W}{T_1 - T_2}$$

$$\frac{W}{Q_1} = \frac{T_1 - T_2}{T_1}$$

茲ニ W ハ此ノ輪廻中ニテナス全外部仕事ニシテ「エネルギー」保存ノ關係ヨリ  $Q_1 - Q_2$  ナル事勿論ナリ、而シテソノ値ハ

$$W = Q_1 - Q_2 = rT_1 \log_e \frac{v_2}{v_1} + rT_2 \log_e \frac{v_4}{v_3}$$

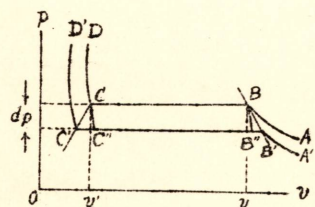
$$= r(T_1 - T_2) \log_e \frac{v_2}{v_1}$$

ニシテ圖ニ於テ 1, 2, 3, 4 ナル閉曲線カ包ム面積ニ依リテ表ハナル、

### 一七、壓力ト沸騰點及融解點トノ關係、

沸騰點及融解點ガ外壓ニヨリ變化スル事ハ既ニ知ル所ナルモ此ノ關係ヲ熱力學的ニ考察セン、

沸騰點ニ及ボス壓力ノ影響、今或物質ノ 1 瓦ヲ考へ僅カ異ル二溫度  $T, T - \Delta T$  ニ於ケル氣液共存狀態附



近ノ等温線ヲ  $p-v$  圖ニ於テ ABCD 及 A'B'C'D' トス、AB 部分ハ氣體、CD 部分ハ液體、BC 部分ハ氣液共存狀態ナリ、今 CBB'C''C' ノ四可逆過程ヨリナル Carnot

輪廻ヲ考フルトキ、 $\overrightarrow{CB}$  過程ニ於テ吸收スル熱量  $Q$  ハ  
1 瓦ガ液體ヨリ氣體ニ氣化スルニ要スル熱量即チ氣  
化熱  $L$  ナルヲ以テ、

$$Q = L_{cal} = JL_{erg}$$

ニシテ、一方此輪廻ニ於テ爲ス全仕事  $W$  ハ  $CBB''C''$   
ノ面積ニテ表ハサルヲ以テ  $\Delta T$  ナル温度差從ツテ  
 $\Delta p$  ナル壓力差ガ微小ナルトキハ之ヲ平行四邊形ノ面  
積ト看做シ、 $C$  點ノ容積ヲ  $v'$ 、 $B$  點ノ容積ヲ  $v$  トセバ

$$W = (v - v') \Delta p$$

故ニ Carnot 輪廻ノ關係式ニヨリ

$$\frac{(v - v') \Delta p}{JL} = \frac{W}{Q} = \frac{T - (T - \Delta T)}{T} = \frac{\Delta T}{T}$$

$$\therefore \frac{\Delta T}{\Delta p} = \frac{T(v - v')}{JL}$$

茲ニ  $v, v'$  ハ氣體及液體ニ於ケル 1 瓦ノ容積(比容積)ナ  
ルガ、 $v > v'$  ナル故  $\frac{\Delta T}{\Delta p}$  ハ正ニシテ蒸氣壓ガ温度ト共  
ニ増ス、即チ外壓大ナルニ從ヒ沸騰點ノ上昇ヲ示ス、此  
ノ關係ヲ **Clapeyron** ノ式ト稱ス、

融解點ニ及ボス壓力ノ影響、上ト全ク同様ニシテ  
外壓ト融解點間ノ變化關係ヲ表ス式トシテ

$$\frac{\Delta T}{\Delta p} = \frac{T(v' - v'')}{JL'}$$

ヲ得、茲ニ  $L'$  ハ融解熱、 $v', v''$  ハ液體ト固體ニ於ケル比  
容積ナリ、

### 練習問題

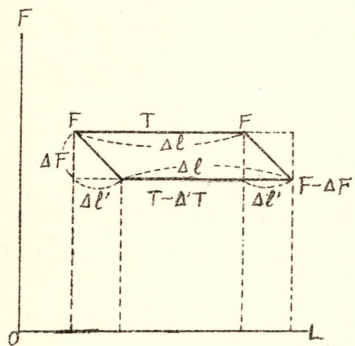
1. 水攝氏  $100^\circ$ 、760 耗附近ニ於 1 耗ノ外壓増加ニ對  
スル沸騰點上昇並ニ零度ニ於テ 1 氣壓ノ外壓増加ニ

對スル融解點ノ下降ヲ求メ、且實測値ト比較セヨ、

2. 攝氏 100.1°ニ於ケル水ノ飽和壓ハ 762.7 托ナリ、攝氏 100°ノ水ノ蒸發熱ヲ計算セヨ、

### 一八、斷熱的伸長ニ基ク溫度ノ變化、

今金屬棒ノ溫度  $T$ 、長サ  $l$ 、張力  $F$ 、斷面單位面積ナルモノヲ採リ、圖ノ如ク之ニ  $Q_1$  ナル熱ヲ加ヘテ等溫



膨脹ヲナサシメ  $l + \Delta l$  トナシ更ニ斷熱膨脹ニテ  $l + \Delta l + \Delta l'$  ニ到ラシムレバ溫度ハ  $T - \Delta T$  トナリ張力ハ  $F - \Delta F$  トナルベシ、次ニ熱量  $Q_2$  ヲ奪ヒテ等溫壓縮ヲナサシメ  $l + \Delta l'$  トシ、更ニ斷熱壓縮ニテ元ノ状態ニ戻ラシムベシ、此ノ時ナス仕事ハ近似的ニ

$$\Delta W = \Delta F \cdot \Delta l$$

ナリ、然ルニ  $\Delta F = \alpha E \Delta T$  ナル事卷一ニ依リ知ル所ナリ、且

$$\frac{Q_1}{T} = \frac{Q_2}{T - \Delta T} = \frac{Q_1 - Q_2}{\Delta T}$$

ナルヲ以テ第一法則ニ依リ

$$\begin{aligned} \Delta W &= J(Q_1 - Q_2) \\ \therefore \Delta F \cdot \Delta l &= \frac{JQ_1}{T} \Delta T = \frac{JQ_1}{T} \frac{\Delta F}{\alpha E} \end{aligned}$$

$$\therefore Q_1 = \frac{\alpha ET}{J} \Delta l$$

ナリ、然ルニ始メ棒ヲ  $l + \Delta l$  ニ延長セシムル際ニ熱ヲ與ヘザリシナラバ、自ラ冷却セルナルベシ、其ノ爲メニ起ルベキ温度ノ變化ヲ  $\Delta t$  トセバ棒ノ比熱  $c$ 、比重  $\rho$  ナルトキ  $-c\rho\Delta t$  ノ熱ヲ加フレバ、長サ  $l + \Delta l$  ニテ温度  $T$  ノ状態即チ等温膨脹ノ際ノ状態ニナルベシ、從ツテ

$$Q_1 = -c\rho\Delta t$$

$$\therefore \Delta t = \frac{-\alpha ET}{Jc\rho} \Delta l$$

ナリ、即チ一般ニ断熱的伸長ノ爲ニ温度ハ降下ス、然レドモ膨脹率  $\alpha$  ガ負量ナルトキハ伸長ノ爲ニ温度上昇ス、「ゴム」ハ此ノ適例ナリ、

## 一九、熱力學第二法則、

第一法則ニ從ヘバ力學的「エネルギー」ヲ熱ニ換ヘル事モ又反對ニ熱ヲ力學的「エネルギー」ニ換ヘル事モ同ジ程度ニ可能ナル故、

$$Q \longleftrightarrow AW$$

ナル式ニテ表ハサル、然ルニ自然現象ノ嚴密ナル觀察ニ依レバ實際ニハ之等ノ轉換ハ同ジ容易サヲ以テ互ニ轉換サレズ、即チ力學的「エネルギー」ハ完全ニ熱ニ換ヘ得ルニ拘ハラズ、熱ヲ力學的「エネルギー」ニ換ヘル際ニハ常ニ或制限ヲ受ク、即チ摩擦ニ依ル熱發生、温度差ノ下ノ熱傳導、氣體ノ自由膨脹等ノ諸現象ニ見ルモ明ラカナリ、之等非可逆現象ハ既知ノ或法則、例ヘバ「エネルギー」保存則等ヨリ結論サレ得ル事デナク經驗的ナル



事實ナリ、カカル現象ハ熱(或ハヨリ正確ニ言ヘバ分子運動又ハ原子運動)ガ關聯スル場合ニ於テ現ハレ、此ノ非可逆性ノ存在ハ人力ノ御シ得ヌ變化ノ方向性ヲ持ツコトヲ意味スルモノナリ、之等非可逆現象ノ存在ヲ立脚點トシ、之等ヲ綜合統一セル諸現象ノ方向性ヲ指示スル如キーツノ概觀的法則ガアリ得レバ便利ナリ此ノ意味ニ於テ作ラレタルモノガ熱力學第二法則ナリ、從ツテ此ノ表現ハ多種多様ニアリ今 Planck ニヨル表現ヲ示サバ次ノ如シ、

**熱源ヲ冷ス事ト純力學的仕事ヲナス外ハ何等ノ影響モ及ボサズシテ輪廻過程ヲナス機關ハ製作不能ナリ、**

即チ或機關ガ一輪廻ヲナシ元ニ還ル迄ニ熱源ガ冷サレタル變化ト、力學的仕事ガナサレタル變化ノ外ハ、自身ニモ周圍ニモ全然何等ノ變化ヲ齎サヌ如キ機關ハ作り得ヌトイフ意味ニシテ、換言セバ熱源ヨリノ熱量ヲ全部ソレト等量ノ力學的的外部仕事ニ變ヘル事ノミヲスル機關ハ有リ得ヌトイフ意味ナリ、

假リニ上ノ如キ機關ガ可能ナリトセバ摩擦、熱傳導、氣體ノ自由膨脹等凡テ可逆的トナル、即チ摩擦ニ依リ發生セル熱ヲソノ機關ニテ吸收シ、此ノ全部ヲ等量ノ力學的仕事トシテ物體ニ與ヘ、摩擦前ノ速度ニ復セシムレバ、摩擦セル物體モ機關モ其ノ他ノ總テモ原狀ニ還リ得、又自由膨脹セル氣體ノ場合モ、先ヅ之ヲ壓縮シテ前ノ容積トナシ其ノ際發生セル熱量ヲ上ノ機關ニ吸

收シ、之ヲ等量ノ力學的仕事トシテ氣體壓縮ノ際ノ仕事ニセバ全部ガ全ク原狀ニ還リ得、即チ可逆ナリ、然ルニ上述ノ如キ諸現象ハ非可逆ナリ、從ツテカカル機關ノ存在ハ不可能ナリ、即チ諸種非可逆現象ガ存在スル以上第二法則ハ其ノ必然的の結果ナリ、逆ニ第二法則ヲ認ムル以上、上例ノ諸現象ハ必ズ非可逆ナラザル可カラズ、何トナレバ假リニ摩擦現象ガ可逆ナリトセバソハ即チ發生セル熱ヲ全部ソレト等量ノ力學的仕事ニ換ヘル事ノミヲ爲シ得ルコトトナリ、之ヲ利用セバ上述ノ機關ガ可能トナル可キナリ、

永久運動、何ラノ「エネルギー」ノ供給ナクシテ外部ニ仕事ヲナシツツ永久ニ運動スルトキ之ヲ第一種永久運動ト云フ、此ノ不可能ナルコトハ「エネルギー」保存則ノ要求スル所ナリ、依ツテ「エネルギー」保存則、或ハ熱力學第一法則ハ第一種永久運動ハ不可能ナリト述ブルモ可ナリ、次ニ熱源ヨリ熱ヲ取リテ力學的仕事ヲナス外ハ何等ノ變異ヲ齎サヌ機關、即チ上記ノ第二法則ニ述ベタル如キ機關ガ存在シ得ルナラバ、土地ニモ大氣ニモ海洋ニモ殆ド無盡藏ノ熱量存在セルヲ以テ之ヲ利用セバ永久ニ仕事ヲ爲シツツ運轉シ得ルナリ、カカルモノヲ第二種永久運動ト稱ス、之ノ不可能ナルコトハ經驗上ノ事實デモアリ、又上記第二法則ノ要求セル所ナリ、依リテ Ostwald ハ熱力學第二法則ヲ第二種永久運動ハ不可能ナリト述ベタリ、

第二法則ノ他ノ表現法、Clausius ハ簡單ニ熱ハソレ

自身ニテ低温度ヨリ高温度ニ移ル事ナシト云ヒ表ハセリ、茲ニソレ自身トハ如何ナル補助ノ方法ヲ用ヒテモ周圍ニ何等ノ變化ヲ殘ス事ナシト云フ意味ナリ、此ノ表現法ハ傳熱ノ非可逆性ヲ率直ニ云ヘルモノニシテ、形ハ異レドモ前二者ノ表現法ト全ク同ジ内容ヲ有スルモノナリ、即チ若シ熱ガ他ノ補助ヲ藉ラズシテソレ自身ニ低温度ノ物體ヨリ高温度ノ物體ニ移動シ得ルモノト假定セバ、熱ヲシテ自ラ低温度ノ物體ヨリ高温度ノ物體ニ移ラシメ、然ル後 Carnot 輪廻ヲナサシメ高温度ヨリ熱ヲ取り低温度ニ前ト同量ノ熱ヲ與ヘテ外部ニ仕事ヲナサシムル如キ過程ヲ行ヒ得、然ルトキハ低温度物體ノ熱量ノ變化ナク、高温度物體ノ一部ノ熱量ガソノ儘仕事トナリ外部ニ何等變化ナシ、之 Planck ノ表現法ト一致セル所ニシテ又 Ostwald ノ表現法トモ一致ス、次ニ Lord Kelvin ハ次ノ如ク考ヘタリ、即チ熱以外ノ「エネルギー」ハ之ヲ理想的ニ利用セバ殆ドソノ全部ヲ仕事ニ變ズルヲ得ベシ、然ルニ熱源ノ有スル「エネルギー」ハ理想的ノ場合ニ於テモ尙ソノ一部分ヲ仕事ニ變ジ得ルニ過ギズ、而シテ摩擦及其ノ他ノ現象ニ依リ他種ノ「エネルギー」ハ常ニ熱ニ變ゼントスル傾向ヲ有スルノミナラズ、熱ノ傳導、輻射等ノ現象ハ物體系ノ温度差ヲ減少セントスル傾向ヲ有スルガ故ニ「エネルギー」ノ總量ハ不變ナレドモ、利用シ得ベキ「エネルギー」ノ量ハ常ニ減少シツツアリ、之ヲ「エネルギー」ノ散逸ト稱ス、此ノ事實ヲ以テ彼ハ第二法則ノ一ツノ表

現法トセリ、尙此ノ外後述セルモ「エントロピー」ハ増加スヲ以テ第二法則ノ表現法トスルモ可ナリ、

## 二〇、熱機關ノ効率, Carnot ノ定理、

熱機關トハ要スルニ熱源ヨリ熱量  $Q_1$  フトリ其ノ一部ヲ力學的「エネルギー」ニ變ヘテ外部仕事  $W$  フナシ、殘餘ノ熱量  $Q_2 (= Q_1 - W)$  フ冷却器ニ放出シ一輪廻ヲナス機關ト見ラル、此ノ際吸收セル熱量ニ對スル變化セル力學的「エネルギー」ノ比、即チ

$$\frac{W}{Q_1} = \frac{Q_1 - Q_2}{Q_1}$$

ヲソノ機關或ハソノ輪廻ノ熱効率ト稱ス、

[注意] 變化シ得ル力學的「エネルギー」 $W$  モ摩擦等ノ爲ニ其ノ一部  $W'$  ノミヨリ利用出來ズ、此ノ時  $\frac{W'}{W}$  フ力學的効率ト稱ス、以下單ニ効率トハ熱効率ヲ意味ス、

Carnot ノ定理、熱力學第二法則ヨリ次ノ關係ガ結論サル、

1. 同一ノ二溫度間ニ働ク熱機關中可逆機關ノ効率最大ナリ、
2. 同一ノ二溫度間ニ働ク可逆機關ノ効率ハ總テ相等シ、

之ヲ Carnot ノ定理ト云フ、

[証明] 先ヅ  $A$  フ可逆機關、 $B$  フ任意ノ機關トス、 $A$  ハ熱源ヨリ熱量  $Q_1$  フトリ、外部仕事  $W_A$  フナシ、殘リ  $Q_{A_2}$  フ冷却器ニ放出シテ一輪廻ヲナス、之ハ可逆機關ナルヲ以テ逆運轉ヲナシ得、即チ冷却器ヨリ  $Q_{A_2}$  フ

取り、 $W_A$  ノ仕事ヲ外部ヨリ爲サレ、熱源ニ  $Q_1$  フ返シ自身モ其ノ他モ元通り還ル事ヲ得、又 B ハ同ジ熱源ヨリ  $Q_1$  フ取り外部仕事  $W_B$  フナシ、残り  $Q_{B_2}$  フ同ジ冷却器ニ放出スルモノトス、今 B ノ効率ガ A ノ効率ヨリモ大、即チ

$$\frac{W_B}{Q_1} > \frac{W_A}{Q_1} \quad \text{即チ} \quad W_B > W_A \quad \text{從ツテ} \quad Q_{B_2} < Q_{A_2}$$

ト假定ス、A、B 兩機關ヲ同ジ熱源ト冷却器ニ接續シ B ハ順運轉、A ハ逆運轉ヲナストセバ、先ヅ B ハ熱源ヨリ  $Q_1$  フ取り  $W_B$  ノ外部仕事ヲナシ残り  $Q_{B_2}$  フ冷却器ニ放出シ、次ニ A ハ冷却器ヨリ  $Q_{A_2}$  フ取り  $W_A$  ノ仕事ヲ外部ヨリ爲サレ  $Q_1$  ノ熱量ヲ熱源ニ放出ス、此ノ結果上記ノ一輪廻ニ於テ結局冷却器ヨリ  $Q_{A_2} - Q_{B_2}$  ノ熱量ヲ取り、外部仕事  $W_B - W_A$  フ爲セル事トナリ、然モ機關ニモ周圍ニモ何等ノ變化ヲ齎サス、之第二法則ニ反ス、故ニ  $W_B \not> W_A$ 、即チ任意ノ機關 B ノ効率ハ可逆機關 A ノ効率ヨリ大デアリ得ス、即チ可逆機關ノ效率ガ最大値ナリ、

次ニ上ノ証明ニ於テ B ハ任意ノ機關ナル故 B ガ可逆機關ニテモ成立ス、即チ

$$W_B \not> W_A \quad \text{而シテ} \quad B \text{モ可逆ナル故} \quad W_A \not> W_B$$

從ツテ  $W_A = W_B$ 、即チ可逆機關ノ效率ハ總テ相等シ、

## 二一、可逆機關ノ効率、

熱源及冷却器ノ溫度  $T_1, T_2$  ガ一定ノ時ハ總テノ可逆機關ハ同ジ効率ヲ有スルヲ以テ、其ノ効率ヲ見出スニ

ハ最モ考ヘ易キ可逆機關例ヘバ完全氣體ノ Carnot 輪廻ニツキ見出セバ可ナリ、故ニ

$$\text{効率} = \frac{W}{Q_1} = \frac{T_1 - T_2}{T_1}$$

即チ可逆機關ノ効率ハ熱源ト冷却器ノ溫度差ニ比例シ、熱源溫度ニ反比例ス、此ノ事ハ操作物質ノ如何ニ拘ハラズ成立スル事ハ、上ノ証明ニ於テ操作物質ノ性質ニ就キ何等ノ假定ヲ設ケザリシヨリ明カナリ、然レドモ實際ノ機關ニ於テハ摩擦、傳導ノ如キ非可逆變化ノ伴ハザルモノナキガ故ニ効率ハ遙カニ小ナリ、今茲ニ汽罐内ノ壓力 10 氣壓(此ノ時溫度ハ約 180 度)復水器ノ溫度 18°C ナル蒸氣機關アリトシ、假リニ之ガ可逆機關ナリトセバソノ効率ハ 36% ナリ、然レドモ實際ノ蒸氣機關ノ効率ハ最モ良好ナルモノニ於テ 17%、機關車式機關ニ於テハ僅ニ 8% ニ過ギズ、

### 練習問題

1. 溫度ガ夫々攝氏 260° 及 16° ナルニツノ熱源ノ間ニ作働スル完全氣體ノ Carnot 輪廻ノ効率及斷熱膨脹度ヲ求ム、

2. 可逆機關アリ、之ニ供給セル熱量ノ  $\frac{1}{6}$  ヲ有用ノ仕事ニ變ズル事ヲ得、但シ低熱源ノ溫度ヲ 65° ダケ降下セシムルトキハ其ノ効率ハ 2 倍ニナルト、高熱源及低熱源ノ溫度ヲ求ム、

3. 1 盃ノ石炭ガ燃燒スル時ハ 8000 Kcal ノ熱ヲ發生ス、今此ノ石炭ヲ或熱機關ニ使用セバ、0.5 盃ノ石炭ヲ

燃燒スル事ニ依リ 1 馬力時ノ仕事ヲ爲サシムル事ヲ得、此ノ熱機關ノ効率何程ナルカ、又高熱源及低熱源ノ溫度ヲ夫々攝氏  $1000^{\circ}$  及  $0^{\circ}$  ナリト假定シ此ノ間ニ働ク可逆機關ノ効率ト比較セヨ、

4. 傾角  $30^{\circ}$  ニシテ摩擦係數  $\frac{1}{\sqrt{3}}$  ナル斜面ニ沿ウテ 8 噸ノ重サノ物體ヲ 330 呎引揚グル間ニ効率 10% ナル熱機關ハ何程ノ石炭ヲ消費スベキカ、但シ石炭 1 听ノ發熱量ハ 15500 B. t. u. ナリトス、

5. 一ツノ熱空氣機械アリ、ソノ最大絶對壓力 7 砵/平方呎、最高溫度攝氏  $316^{\circ}$  トシ、且 Carnot 輪廻ニヨリ働クモノトス、最初容積 0.06 立方米、等溫膨脹後ノ容積 0.14 立方米、又斷熱膨脹後ノ容積 0.23 立方米ナリトス、若シ機械ガ複動ニシテ毎分 30 廻轉ナラバ馬力ハ幾何ナリヤ、

6. 蒸氣機關ノ吸鑊ノ面積 200 平方吋ニシテ、衝程ノ長サ 3 呎、吸鑊ノ後方ニ於ケル平均壓力ハ其ノ前方ニ於ケルモノヨリモ 25 听/平方呎 丈ケ大ニシテ一分間ニ於ケル往復衝程ノ數 50 ナリ、

(i) 此ノ機關ノ馬力如何、

(ii) 此ノ機關ハ一時間ニ 300 听ノ石炭ヲ消費シ、此ノ石炭 1 听ノ發熱量ハ 8000 C. h. u. ナリトセバ、爐ニ發生スル熱ノ有益ナル仕事ニ變ゼラルル歩合如何、

## 二二、熱力學的絶對溫度尺度、

前ニ述ベシ如ク Carnot 輪廻ニ於ケル二ツノ等溫過

程ニ於テ吸收熱量ト放出熱量ノ比ハ物質ニ無關係ナリ、Lord Kelvinハ此性質ヲ用ヒテ溫度ヲ次ノ如ク定義セリ、即チ任意ノ物質ノ Carnot 輪廻ニ於ケル兩等溫變化ノ際ノ溫度  $\tau_1, \tau_2$  トハ前記ノ  $T_1, T_2$  ノ如ク實際吸收及放出スル兩熱量  $Q_1, Q_2$  ニ比例スベキモノ、即チ

$$\frac{Q_1}{\tau_1} = \frac{Q_2}{\tau_2}$$

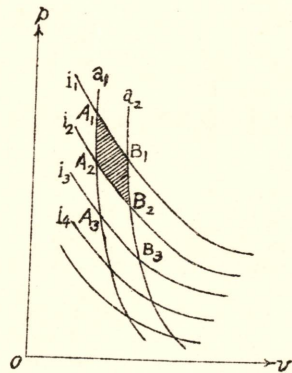
ヲ満足スベキモノトセリ、茲ニ  $Q_1, Q_2$  ハ「エネルギー」ナル故溫度ノ定義ヲ俟タズシテ考ヘ得ル量ナリ、斯ク定義セラレタル溫度ヲ熱力學的溫度ト稱ス、此ノ溫度ハ之迄考ヘタル溫度、例ヘバ水銀、白金或ハ水素ノ熱膨脹或ハ其他ノ關係ニ就キテノ或法則ノ假定ノ下ニ規定セラレタル溫度ト異リ、物質ニ無關係ニ定メ得ルヲ以テ之ヲ絕對溫度ト稱ス、

絕對溫度、Carnot 輪廻ニ放出セラルル熱量  $Q_2$  ガ零ナル等溫壓縮過程ノ溫度ハ  $\tau_2=0$  デアリ、此ノ場合ノ効率ハ 1 トナリ、熱源ヨリノ熱量ガ全部力學的「エネルギー」ニ變ズ、從ツテ  $\tau=0$  ヲ以テ溫度ノ最下限度ト見ルベキナリ、此ノ零度ハ攝氏ノ零度等ト異リ唯相對的ニ規程セルモノト異ル、故ニ之ヲ絕對零度ト稱ス、之ノ分子運動論的意義ハ既ニ述ベタリ、

溫度尺度、次ニ如何ニシテ尺度ヲ目盛ルベキカラ具體的ニ述ブレバ任意ノ物質ノ種々ノ溫度  $\tau_1, \tau_2, \tau_3, \dots$  ニ於ケル等溫線  $i_1, i_2, i_3, \dots$  及任意ノ二ツノ斷熱線  $\alpha_1, \alpha_2$  ヲ考ヘ、夫等ノ曲線ガ作ル多クノ Carnot 輪廻  $A_1 B_1 B_2 A_2,$



$A_2 B_2 B_3 A_3 \dots\dots$  = 於テ、 $A_1 B_1, A_2 B_2, \dots\dots$ ノ變化ニ際シテ吸  
收スル熱量ヲ夫々  $Q_1, Q_2, \dots\dots$ トセバ



$$\frac{Q_1}{\tau_1} = \frac{Q_2}{\tau_2} = \frac{Q_3}{\tau_3} = \dots\dots,$$

從ツテ

$$\frac{Q_1 - Q_2}{\tau_1 - \tau_2} = \frac{Q_2 - Q_3}{\tau_2 - \tau_3} = \frac{Q_3 - Q_4}{\tau_3 - \tau_4} = \dots\dots,$$

或ハ

$$\frac{W_1}{\tau_1 - \tau_2} = \frac{W_2}{\tau_2 - \tau_3} = \frac{W_3}{\tau_3 - \tau_4}$$

今若シ

$$W_1 = W_2 = W_3 = \dots\dots \equiv W$$

トナル如ク、即チ個々ノ輪廻ノ包ム面積ガ等シクナル  
如ク、各等温線ノ温度ヲ選ベバ、

$$\tau_1 - \tau_2 = \tau_2 - \tau_3 = \tau_3 - \tau_4 = \dots\dots$$

ノ關係アルコトナリ、ソレラノ溫度ハ次々相等シキ溫度差ヲ持ツ事トナル、故ニ此ノ溫度差ヲ單位  $1^\circ$  トセバ、上記ノ各溫度ハ  $1^\circ$  ツツノ差ガアル事トナリ、 $W' = nW$  ノ外部仕事ヲナス如キ Carnot 輪廻ノ兩等溫度ノ溫度差ハ  $n^\circ$  トナル、而シテ水ノ沸騰點ト氷點トノ溫度差ガ 100 單位ニナル如ク單位ヲ定ムレバ、之迄考へタル溫度計尺度ト一致ス、但シ上記ハ單ニ尺度決定ノ理論的説明ニシテ實際ハ斯クシテ絕對溫度ヲ測定スルモノニ非ズ、

### 二三、任意ノ可逆輪廻及非可逆輪廻、

一定ノ二溫度  $T_1, T_2$  ニ於テノミ熱ヲ授受スル任意ノ輪廻ニ於テハ、

$$\frac{W}{Q_1} = \frac{Q_1 - Q_2}{Q_1} \leq \frac{T_1 - T_2}{T_1}$$

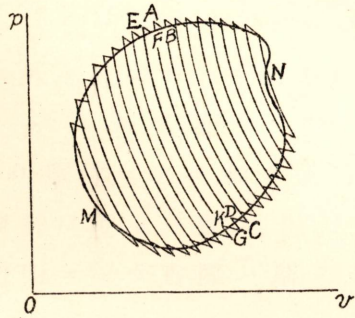
ニヨリ

$$\frac{Q_1}{T_1} \leq \frac{Q_2}{T_2} \quad \text{或ハ} \quad \frac{Q_1}{T_1} - \frac{Q_2}{T_2} \leq 0$$

ノ關係アリ、茲ニ等號ハ可逆輪廻ノ場合ナリ、若シ熱量  $Q$  ニ正負ヲ考へ吸収ノ場合ニ正、放出ノ場合ニ負ト規約セバ、上ノ關係ハ

$$\frac{Q_1}{T_1} + \frac{Q_2}{T_2} \leq 0$$

ナリ、今或系ガ任意ノ輪廻 MANC ヲナスモノトス、此ノ輪廻ハ圖ノ如ク ABCD, EFGK, ..... ノ無數ノ微小ナル Carnot 輪廻ヨリ成ルモノト看做スヲ得、而シテ此ノ輪廻ノ一ツニ於テ操作物質ガ  $T_m$  ナル溫度ニ於テ等



温膨脹ヲナス際ニ獲得セル熱量ヲ  $dQ_m$ ,  $T_m$  ナル温度ニ於テ等温壓縮ヲ受クル際ニ放出セル熱量ヲ  $dQ_n$  トセバ

$$\frac{dQ_m}{T_m} + \frac{dQ_n}{T_n} \leq 0$$

ナリ、此ノ關係ハ總テノ微小ナル Carnot 輪廻ニ於テ成立スルヲ以テ其ノ總和ヲ求ムレバ

$$\sum \frac{dQ}{T} \leq 0 \quad \text{或ハ} \quad \oint \frac{dQ}{T} \leq 0$$

茲ニ  $\frac{dQ}{T}$  ハ途中ノ或温度  $T$  デノ微小變化中ニ授受セル熱量  $dQ$  ヲソノ温度ニテ除セルモノニテ Lorentz ニヨリ換算熱量ト名付ケラレタルモノナリ、

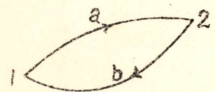
**Clausius ノ定理**、上記ノ關係ハ熱力學第二法則ノ一形式トシテ Clausius ニヨリ見出サレタル關係ニシテ之ヲ Clausius ノ定理ト呼ブ即チ任意ノ輪廻ノ全過程ニ於テ取得サルル換算熱量ノ總和ハ負カ或ハ零デアリ可逆輪廻ニ於テ零ナリ、

#### 二四、「エントロピー」(Entropy)

Clausius ノ定理ヨリ直ニ次ノ關係ガ結論サル、  
或系ガ或状態 1 ヨリ他ノ状態 2 ニ可逆的ニ變化スルトキ取得スル換算熱量ハソノ過程ノ如何ニ拘ラズ一

定値ナリ、

即チ圖ニ於テ



$$\oint_1^1 \frac{dQ}{T} = 0$$

$$\therefore \int_1^2 \frac{dQ}{T} + \int_2^1 \frac{dQ}{T} = 0$$

而シテ 1 b 2 ハ可逆ナルヲ以テ

$$\int_2^1 \frac{dQ}{T} = - \int_1^2 \frac{dQ}{T}$$

$$\therefore \int_1^2 \frac{dQ}{T} = \int_1^2 \frac{dQ}{T}$$

即チ  $\int_1^2 \frac{dQ}{T}$  ハ 1→2 ノ過程ノ如何ニ係ハラズ一定ナリ、

**エントロピー**、或系ガ或標準状態 S ヨリ或状態 A 迄可逆的ニ變化スル際ニ取得スル換算熱量  $\int_S^A \frac{dQ}{T}$  (可逆) ヲソノ系ノ A 状態ニ於ケル「エントロピー」ト稱ス、而シテ此ノ値ハ S→A ノ變化過程ノ如何ニ拘ハラズ可逆ナル以上一定値ナルヲ以テ、或状態ノ「エントロピー」ハソノ状態サヘ決定セバ之ニ應ジテ一ツニ決ル、今「エントロピー」ヲ S ニテ表サバ

$$S_A = \int_S^A \frac{dQ}{T} \quad (\text{可逆})$$

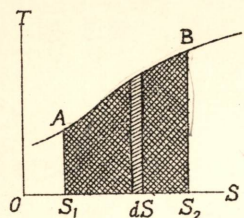
從ツテ他ノ状態 B トノ差ハ

$$S_B - S_A = \int_A^B \frac{dQ}{T} \quad (\text{可逆})$$

### 二五、「エントロピー」溫度線圖、

「エントロピー」S ト溫度 T トヲ二軸ニ取り系ノ状態變化ノ過程ヲ圖示セルモノガ「エントロピー」溫度線圖

このページには、エントロピーと温度の関係に関する説明と、二つの図が描かれています。上部の図は、温度 T を縦軸、エントロピー S を横軸としたグラフで、可逆過程の熱量 dQ を T で割った積分がエントロピーの変化に等しいことを示しています。下部の図は、エントロピー S と温度 T の関係を示すグラフで、状態 A から状態 B への変化が示されています。



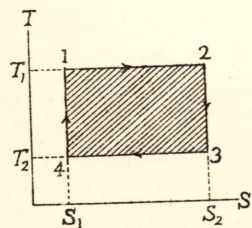
ナリ、

圖示ノ如ク變化ガA状態ヨリ  
B状態ニナサレタリトセバ斜線  
部ノ微小面積ハ  $T ds = T \frac{dQ}{T} = dQ$   
ヲ表ハスヲ以テソノ間ニ吸收セ  
ル全熱量  $Q$  ハ  $ABS_2S_1$  ナル面積  
ニテ表ハサル、

今變化過程ガ輪廻ヲナス時ハ「エントロピー」溫度線  
圖ハ勿論閉曲線トナリ、ソノ過程ガ可逆ナラバソノ閉  
曲線ガ包ム面積ハ一輪廻中ニ於テ系ガ授受セル全熱  
量、從ツテ系ガ爲シ或ハ爲サレタル全仕事ヲ表ス、

次ニ等温變化ニ於テハ  $S-T$  線圖ハ  $S$  軸ニ平行ナル  
直線トナリ、斷熱可逆變化ニ於テハ等「エントロピー」變  
化ナルヲ以テ  $T$  軸ニ平行ナル直線トナル、

Caruot 輪廻ノ  $S-T$  線圖、 Carnot 輪廻ハ一組ノ等温



變化ト斷熱變化トヨ  
リナルヲ以テ、準靜的  
過程ヲナストセバ可  
逆ナルヲ以テ、圖ノ如  
ク矩形トナル、其ノ包  
ム面積  $\square 1234$  ガ差引  
吸收セル全熱量、即チ  
全外部仕事  $Q_1 - Q_2 = W$   
ヲ表シ、効率ハ

$$\frac{W}{Q} = \frac{\square_{1234}}{\square_{12S_2S_1}} = \frac{\square_{12S_2S_1} - \square_{43S_2S_1}}{\square_{12S_2S_1}} = \frac{T_1 - T_2}{T_1}$$

トナリ、前述ノ關係ハ容易ニ見出サル、

## 二六、「エントロピー」ノ計算

完全氣體ノ「エントロピー」、完全氣體ノ可逆變化ニ於テハ其ノ單位質量ヲ取レバ、

$$dQ = dU + pdv, \quad dU = c_v dT, \quad pv = rT$$

ノ關係ヨリ

$$dQ = c_v dT + \frac{rT}{v} dv$$

$$\therefore dS = \frac{dQ}{T} = c_v \frac{dT}{T} + r \frac{dv}{v}$$

從ツテ

$$S = c_v \log_e T + r \log_e v + \text{const.}$$

故ニ  $T_1, v_1 \rightarrow T_2, v_2$  ナル變化ノ際ノ「エントロピー」ノ變化ハ單位質量ニツキ

$$S_2 - S_1 = c_v \log_e \frac{T_2}{T_1} + r \log_e \frac{v_2}{v_1}$$

之ハ又  $pv = rT$ ,  $c_p - c_v = r$  ナル關係ニヨリ、次ノ如キ形ニテモ表ハサル、

$$S_2 - S_1 = c_p \log_e \frac{T_2}{T_1} - r \log_e \frac{p_2}{p_1}$$

或ハ

$$S_2 - S_1 = c_p \log_e \frac{v_2}{v_1} + c_v \log_e \frac{p_2}{p_1} = c_v \log_e \frac{p_2 v_2^{\gamma}}{p_1 v_1^{\gamma}}$$

今特別ノ場合ニ就キ考究セン、

(i) 等溫變化、此ノ時ハ  $T_1 = T_2$  ナルヲ以テ

$$S_2 - S_1 = r \log_e \frac{v_2}{v_1} = r \log_e \frac{p_1}{p_2}$$

(ii) 恒定容積變化、此ノ時ハ  $v_1 = v_2$  ナルヲ以テ

$$S_2 - S_1 = c_v \log_e \frac{T_2}{T_1} = c_v \log_e \frac{p_2}{p_1}$$

(iii) 恒定壓力變化、此ノ時ハ  $p_1 = p_2$  ナルヲ以テ

$$S_2 - S_1 = c_p \log_e \frac{v_2}{v_1} = c_p \log_e \frac{T_2}{T_1}$$

固體液體ノ「エントロピー」、固體或ハ液體ガ熱量  $dQ$  ヲ得テ温度  $dT$  ノ上昇ヲ來シタリトセバ、 $dQ = cdT$  ナル故

$$dS = \frac{dQ}{T} = c \frac{dT}{T}$$

$$\therefore S_2 - S_1 = c \log_e \frac{T_2}{T_1}$$

状態變化ノ「エントロピー」、固體ヨリ液體、液體ヨリ氣體ヘノ状態變化ノ際ハ温度一定ナルモ潜熱ヲ要ス、之ヲ  $L$  トセバ「エントロピー」ノ變化ハ  $\frac{L}{T}$  ナリ、

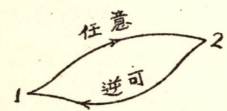
### 練習問題

1. 空氣 1 疋ガ攝氏零度容積 5 立方米ヨリ攝氏 100 度、20 立方米ニ變化セルトキノ「エントロピー」ノ増加ヲ求ム、
2. 空氣 1 疋ガ絶対壓力 1 氣壓、容積 15 立方米ヨリ 10 氣壓、3 立方米ニ變化セルトキノ「エントロピー」ノ増加ヲ求ム、
3. 水 1 疋ヲ攝氏零度ヨリ 100 度迄高ムルトキノ「エントロピー」ノ増加ヲ求ム、

4. 攝氏零度, 氷 1 斤ガ攝氏 100 度ノ水蒸氣ニ變ズル  
トキノ「エントロピー」ノ變化如何、
5. 酸素 1 瓦分子ガ等壓的ニ 2 倍ノ容積ニ膨脹スル  
トキノ「エントロピー」ノ變化ヲ算出セヨ、

### 二七、「エントロピー」増加ノ定理、

今熱ノ取得或ハ放出ハ系内ノミニ起リ系外トハ熱  
ノ授受ナキ系即チ斷熱系ヲ考ヘ、此系内ニ於テ状態 1  
ヨリ状態 2 へ或任意過程ニテ變化シ、次ニ 2 ヨリ 1 へ  
可逆的ニ變化シ一輪廻ヲナセルモノトス、此ノ輪廻ニ



於テ Clausius ノ定理ニヨリ

$$\int_1^2 \frac{dQ}{T} (\text{任意}) + \int_2^1 \frac{dQ}{T} (\text{可逆}) \leq 0$$

(1→2 ガ可逆ノ時等號)

而シテ

$$\int_2^1 \frac{dQ}{T} (\text{可逆}) = - \int_1^2 \frac{dQ}{T} (\text{可逆})$$

ナル故上式ハ

$$\int_1^2 \frac{dQ}{T} (\text{可逆}) \geq \int_1^2 \frac{dQ}{T} (\text{任意})$$

故ニ「エントロピー」ノ定義ニヨリ

$$S_2 - S_1 \geq \int_1^2 \frac{dQ}{T} (\text{任意})$$

然ルニ此ノ式ノ右邊即チ 1→2 ナル任意ノ變化過程ニ  
於テ各部ガ取得スル換算熱量ノ總和ハ必ズ

$$\int_1^2 \frac{dQ}{T} (\text{任意}) \geq 0$$



ナリ、何トナレバ今茲ニ非可逆變化ノ例ヲ舉ゲンニ、傳導ニヨリ熱ヲ授受セル場合ハ與ヘルモノノ溫度  $T_1$  ハ取ルモノノ溫度  $T_2$  ヨリ高キヲ以テ  $\left| \frac{dQ}{T_2} \right| \geq \left| \frac{dQ}{T_1} \right|$  即チ  $-\frac{dQ}{T_1} + \frac{dQ}{T_2} > 0$  トナリ併セテ換算熱量ハ正デアリ、又摩擦ニヨリ發生セル熱量ヲ或部分ガ取得スル場合ハ勿論  $\frac{dQ}{T} > 0$  ナリ、次ニ  $1 \rightarrow 2$  ガ可逆過程ナラバ溫度差ノ下ノ熱傳導モ摩擦ニヨル熱發生モアリ得ナキヲ以テ上式ノ左邊ハ當然零トナル、從ツテ

$$S_2 - S_1 \geq 0 \quad (\text{可逆ノ時等號})$$

即チ「エントロピー」ハ増加スルカ不變ナリ、換言セバ系内ノ變化ハツノ「エントロピー」ノ増加スルガ如キ方向ニ起ル、唯可逆變化ニ於テノミ「エントロピー」ハ不變ナリ、之熱力學第二法則ノ意味スル自然現象ノ變化方向ヲ指示スル簡明ナル表現ニシテ Clausius ヨリ始メテ述べラレ「エントロピー」増加ノ定理ト稱セラル、

宇宙ハ一ツノ斷熱系ナリ、若シ上記ノ定理ガ宇宙ナル一系ニモ適用シ得ルトセバツノ中ノ全「エネルギー」ハ不變ナルモ「エントロピー」ハ増加スルノミデ、遂ニ全「エネルギー」ハ皆熱「エネルギー」ノ形ニナリ、ソレガ皆一樣ナル溫度ニ擴マル迄宇宙ノ「エントロピー」ハ増加スルモノナリ、此處ニ到ツテ全宇宙ハ何等ノ變化活動ナキ絶對ノ靜寂境ヲ出現スル事ニナリ、吾々ハ何カノ現象ガ起ル毎ニ一步一步トツノ境地ニ近ヅキツツアルモノナリ、

## 第二編 傳熱論

### 第一章

#### 固體內ノ熱傳導

##### 第一節 傳熱一般基本式

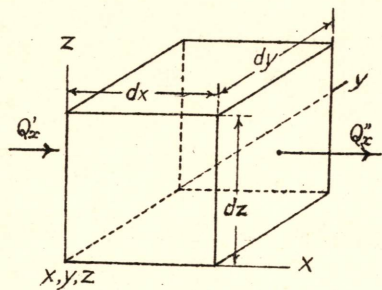
###### 一、熱傳導ノ基本式

熱ハ高溫度ヨリ低溫度ニ移動シ其ノ方向ハ等溫面ニ垂直ナル事ハ既ニ之ヲ知ル、而シテ等溫面上任意ノ表面積  $dF$  フ通り時間  $d\tau$  間ニ流ルル熱量  $dQ$  ハ此ノ熱傳導方向ノ距離即チ垂直距離  $dn$  ニ對スル溫度降下  $d\theta$  ナル時ハ既ニ卷 1 ニヨリ

$$dQ = -\lambda dF \cdot d\tau \frac{\partial \theta}{\partial n}$$

ナル事ハ明ラカナリ、茲ニ  $\lambda$  ハ熱傳導率ナリ、又負號ヲ附ケタルハ熱ハ一般ニ溫度降下ノ方向ニ流ルル故  $\frac{\partial \theta}{\partial n}$  ハ負トナリ併セテ正トナルモノナリ、今一般的ノ場合トシテ溫度降下並ニ熱傳導量ノ變化ヲ求メン爲ニ

均質等方ナル單一物質ノ固體內ニ圖ノ如キ邊ノ長サ  $dx, dy, dz$  ナル一微小直角六面體ヲ考ヘン、然ル時 X 軸方向ノ流入熱量ハ上式ニヨリ



$$dQ'_x = -\lambda(dydz) \cdot d\tau \cdot \frac{\partial \theta}{\partial x}$$

流出熱量ハ

$$\begin{aligned} dQ''_x &= -\lambda(dydz) \cdot d\tau \cdot \frac{\partial}{\partial x} \left( \theta + \frac{\partial \theta}{\partial x} dx \right) \\ &= -\lambda(dydz) \cdot d\tau \cdot \left( \frac{\partial \theta}{\partial x} + \frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2} dx \right) \end{aligned}$$

故ニ X 軸方向ノ増加受熱量ハ

$$dQ_x = dQ'_x - dQ''_x = \lambda(dx dy dz) d\tau \frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2}$$

同様ニシテ Y 並ニ Z 軸方向ノ増加受熱量ハ

*[Faint, mostly illegible text and mathematical derivations on the right page, likely bleed-through from the reverse side.]*

$$dQ_y = dQ_y' - dQ_y'' = \lambda(dx dy dz) d\tau \frac{\partial^2 \theta}{\partial y^2}$$

$$dQ_z = dQ_z' - dQ_z'' = \lambda(dx dy dz) d\tau \frac{\partial^2 \theta}{\partial z^2}$$

從ツテ此ノ六面體ノ全増加受熱量ハ

$$dQ_1 = dQ_x + dQ_y + dQ_z = \lambda(dx dy dz) d\tau \left( \frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \theta}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 \theta}{\partial z^2} \right)$$

然ルニ他方同一時間  $d\tau$  間ニ此ノ六面體ガ受熱シソノ

爲ニ  $\frac{\partial \theta}{\partial \tau} d\tau$  丈温度上昇スルトセバ之ニ必要ナル熱量ハ

此ノ物體ノ比熱ヲ  $c$ , 比重ヲ  $\rho$  トセバ

$$dQ_2 = c\rho(dx dy dz) \frac{\partial \theta}{\partial \tau} d\tau$$

若シ此ノ六面體ガソノ内部ニ熱源ヲ有スルナラバ單位時間, 單位體積ニ對スル發生熱量  $W$  ナル時全發生熱量ハ

$$dQ_3 = W(dx dy dz) d\tau$$

故ニ「エネルギー」保存則ニヨリ

$$dQ_1 + dQ_3 = dQ_2$$

從ツテ之ニ前式ヲ代入セバ

$$\begin{aligned} \frac{\partial \theta}{\partial \tau} &= \frac{\lambda}{c\rho} \left( \frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \theta}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 \theta}{\partial z^2} \right) + \frac{W}{c\rho} \\ &= a \nabla^2 \theta + \frac{W}{c\rho} \end{aligned}$$

茲ニ

$$a = \frac{\lambda}{c\rho} \dots\dots\dots \text{温度傳導率}$$

$$\nabla^2 \theta = \frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \theta}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 \theta}{\partial z^2} = \text{Laplace differential parameter}$$

ト稱ス、此ノ式ハ熱傳導ニ對スル一般微分方程式ニシテ、一ツノ物體內ノ任意ノ場所ニ於ケル温度ノ時間的變化ヲ定ムル重要ナル基本式ナリ、

一般工學上ノ問題ノ如キ内部ニ熱源ナキ過程ニ於テハ  $W = 0$  従ツテ

$$\frac{\partial \theta}{\partial \tau} = a \nabla^2 \theta$$

尙定常熱傳導ノ場合ハ  $\frac{\partial \theta}{\partial \tau} = 0$  ナル故

(i) 内部ニ熱源アル場合、

$$a \nabla^2 \theta + \frac{W}{c\rho} = 0 \text{ 又ハ } \nabla^2 \theta + \frac{W}{\lambda} = 0$$

(ii) 内部ニ熱源ナキ場合、

$$\nabla^2 \theta = 0$$

$\nabla^2 \theta$  此ノ符號ハ理論物理諸部門ニ屢々用キラルルモノニシテ上記ノ直角坐標ニヨルモノノミナラズ、圓柱坐標、球坐標ニヨリ示サルルモノニシテ、此ノ坐標系ノ選擇ハ熱傳導ノ限界面ノ形ニ依リ決定サル、

(i) 直角坐標  $(x, y, z)$

$$\nabla^2 \theta = \frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \theta}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 \theta}{\partial z^2}$$

此ノ微分形ハ矩形又ハ直角六面體ニ適用サル、

(ii) 圓柱坐標  $(r, \varphi, z)$

$x = r \cos \varphi$  ,  $y = r \sin \varphi$  ,  $z = z$  ナル關係ニヨリ

$$\nabla^2 \theta = \frac{\partial^2 \theta}{\partial r^2} + \frac{1}{r} \frac{\partial \theta}{\partial r} + \frac{1}{r^2} \frac{\partial^2 \theta}{\partial \varphi^2} + \frac{\partial^2 \theta}{\partial z^2}$$

此ノ微分形ハ圓柱面ニ適用サル

(iii) 球坐標  $(r, \varphi, \psi)$

$x = r \sin \psi \cos \varphi$  ,  $y = r \sin \psi \sin \varphi$  ,  $z = r \cos \psi$  ナル關係ニヨリ

$$\Delta^2 \theta = \frac{\partial^2 \theta}{\partial r^2} + \frac{2}{r} \frac{\partial \theta}{\partial r} + \frac{1}{r^2} \frac{\partial^2 \theta}{\partial \varphi^2} + \frac{\cot \psi}{r^2} \frac{\partial \theta}{\partial \psi} + \frac{1}{r^2 \sin^2 \psi} \frac{\partial^2 \theta}{\partial \psi^2}$$

此ノ微分形ハ球面ニ適用サル、

一次元熱傳導ノ一般微分方程式、熱導體内ノ一定點ニ於ケル溫度ノ時間的變化及與ヘラレタル刹那ニ於ケル溫度ノ空間的變化ハ勿論與ヘラレタル限界條件ニヨリ上述ノ微分方程式ノ解ヲ求ムル事ニヨリ與ヘラルルモ、實際ニ工學上重要ナル多クノ熱傳導過程ニ對スル所要ノ解ヲ得ル事ハ一般ニハ至難デアリ、又假令所要ノ解ガ得ラルル場合ニ於テモ其ノ結果ヲ得ル爲ノ演算ハ餘リニ複雑トナリ實用價值少キヲ普通トス、サレバ茲ニハ日常遭遇スル一般工學上ノ傳導問題ヲ取扱フ便宜上即チ積分ヲ容易ニシ簡明ニ基本式ヲ得ンガ爲ニ唯一方向ニ熱傳導ヲナス場合ノミヲ考究セン、

(a) 平面壁内ノ熱傳導、

今溫度變化ガ唯 X 軸方向ニノミ起リ Y, Z 兩軸方向ニハ全然溫度變化ナキ場合ヲ考フレバ

$$\frac{\partial^2 \theta}{\partial y^2} = 0 \quad \frac{\partial^2 \theta}{\partial z^2} = 0$$

ナリ、故ニ前式ハ簡單トナリ、

(i) 不定常熱傳導、

内部ニ熱源アル時  $\frac{\partial \theta}{\partial \tau} = a \frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2} + \frac{W}{c\rho}$

内部ニ熱源ナキ時  $\frac{\partial \theta}{\partial \tau} = a \frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2}$

(ii) 定常熱傳導、

内部ニ熱源アル時  $a \frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2} + \frac{W}{c\rho} = 0$  又ハ  $\frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2} + \frac{W}{\lambda} = 0$

内部ニ熱源ナキ時  $\frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2} = 0$

(b) 圓柱又ハ圓筒壁内ノ熱傳導、

圓柱坐標ヲ用ヒ壁内ノ熱傳導ガ唯半徑  $r$  方向ニノ  
ミ起リ軸方向ニハ全然溫度變化ナク而モ内部ニ熱源  
ナキ時ハ

$$\frac{\partial \theta}{\partial \varphi} = 0 \quad \frac{\partial^2 \theta}{\partial z^2} = 0 \quad W = 0$$

ナルヲ以テ

(i) 不定常熱傳導  $\frac{\partial \theta}{\partial \tau} = a \left( \frac{\partial^2 \theta}{\partial r^2} + \frac{1}{r} \frac{\partial \theta}{\partial r} \right)$

(ii) 定常熱傳導、  $\frac{\partial^2 \theta}{\partial r^2} + \frac{1}{r} \frac{\partial \theta}{\partial r} = 0$

(c) 球又ハ中空球壁内ノ熱傳導、

球坐標ヲ用ヒ (b) ノ場合ト全ク同様ニ半徑方向ニ  
ノミ熱傳導ガ起リ、内部ニ熱源ナキ時ハ  $\theta$  ハ  $\varphi, \psi$  ニ  
independent ナルヲ以テ

$$\frac{\partial^2 \theta}{\partial \varphi^2} = 0 \quad \frac{\partial \theta}{\partial \psi} = 0 \quad \frac{\partial^2 \theta}{\partial \psi^2} = 0 \quad W = 0$$

ナリ、故ニ

(i) 不定常熱傳導、  $\frac{\partial \theta}{\partial \tau} = a \left( \frac{\partial^2 \theta}{\partial r^2} \right) + \frac{2}{r} \frac{\partial \theta}{\partial r}$

(ii) 定常熱傳導、  $\frac{\partial^2 \theta}{\partial r^2} + \frac{2}{r} \frac{\partial \theta}{\partial r} = 0$

與ヘラレタル問題ニ對スル限界條件ヲ知レバ之等ノ  
基本式ヨリ溫度ノ時間的變動又ハ分布從ツテ傳導熱  
量ノ式ハ決定サル、

## 二、熱傳達ノ基本式 (Newton ノ冷却則)、

熱傳達トハ一般ニ固體表面トソレニ接觸スル周圍  
流體間ノ熱授受、即チ雷ニ傳導ニヨルノミナラズ對流

ニヨリテモ亦氣體内ニ於テハ同時ニ熱輻射ニヨリテモ行ハレ、從ツテ傳熱量ハ雜多ナ原因ニヨリテ影響ヲ受ケ複雑ナル過程トナル故未ダ現在ニテハ此ノ過程ニ對スル決定的ナル定義式ハ與ヘラレズ、永年此ノ基本式トシテ一般ニ Newton ノ冷却則ガ廣ク採用ナル、即チ此ノ冷却則ハ溫度  $\theta$ 、表面積  $dF$  ナル固體表面ヨリ  $d\tau$  時間ニ溫度  $t$  ナル周圍流體ニ傳達スル熱量  $dQ$  ハ

$$dQ = \alpha dF \cdot d\tau (\theta - t)$$

ナリ、茲ニ周圍流體溫度トハ固體表面ニ近接セル流體溫度ノ謂デハナク、固體面ヨリ一定ノ距リニアリ、固體壁ノ存左ニハ無關係ナル流體溫度ヲ意味スル、從ツテ兩溫度  $\theta$ 、 $t$  ガ時間的ニ變化セザル定常状態ニ於テ表面積  $F$  ヨリ時間  $\tau$  ニ傳達スル熱量ハ簡單ニ次ノ如ク與ヘラル、

$$Q = \alpha \cdot F \cdot \tau (\theta - t)$$

之等ノ式ニ於ケル常數  $\alpha$  ハ一般ニ熱傳達率ト稱セラレ、單位表面積 ( $F=1\text{m}^2$ ) ヲ通リテ單位時間 ( $\tau=1\text{h}$ ) ニ單位溫度差 ( $1^\circ$ ) ニ於テ傳達スル熱量ヲ表ハシ、ソノ「チメンション」ハ

$$[\alpha] = [\text{Kcal}/\text{m}^2 \text{ h} \cdot ^\circ\text{C}]$$

トナル、尙此ノ恒數  $\alpha$  ハ輻射、對流、傳導ガ傳熱量ニ及ボス全影響ヲ表ハシ後述ノ如ク固體ノ表面状態、氣體ノ流動状態等ノ複雑ナル函數トナリテ決定ニ困難ナリ、今大體ノ範圍ヲ示サバ

$$\alpha [\text{Kcal}/\text{m}^2 \cdot \text{h} \cdot ^\circ\text{C}]$$



静止セル空氣	3 — 30
流動セル空氣	10 — 500
流動セル液體 (沸騰中ナラザル)	200 — 5000
沸騰中ノ液體	1000 — 7000
凝結中ノ蒸氣	7000 — 12000

熱傳達抵抗 屢々上式ヲ次ノ如ク書キ換へ

$$Q = \frac{F\tau(\theta - t)}{r_s} = \frac{\tau(\theta - t)}{R_s}$$

茲ニ

$$r_s = \frac{1}{a} \dots \dots \text{固體壁表面積 (1 m}^2\text{)ニ對スル熱傳達抵抗}$$

[m<sup>2</sup>h°C/Kcal]

$$R_s = \frac{1}{aF} \dots \dots \text{全熱傳達抵抗} \quad [h^\circ\text{C/Kcal}]$$

恰モ電氣工學ニ於ケル Ohm ノ法則, 即チ電流ハ電壓ニ比例シ抵抗ニ逆比例スル如ク, 傳達熱量モ溫度差ニ比例シ熱傳達抵抗ニ逆比例スルモノトシテ表ハシ,  $r_s, R_s$ ヲ熱傳達抵抗ト名付ケ $r_s$ ハ單位斷面積ニ對スル熱傳達抵抗ニシテ,  $R_s$ ハ斷面  $F$ ニ對スル全熱傳達抵抗ナリ、

### 三、熱貫流ノ基本式、

熱貫流トハ固體壁ニテ距テラレタル熱授受過程ヲ稱シ, 熱ガ傳達→傳導→傳達ニ依リテ傳ハル全過程ヲ表ハス、從ツテ單ナル熱傳導過程ヨリモ更ニ複雑ナル過程トナル故一般ニハ理論上獨立セル一過程トシテハ取扱ハズ、Newtonノ冷却則同様貫流熱量ハ固體表面積  $F$ , 時間  $\tau$ , 兩流體ノ溫度差  $(t_1 - t_2)$ ニ比例ストノ假定

ノ下ニ次ノ如ク基本式ヲ定ム、

$$Q = k \cdot F \cdot \tau (t_1 - t_2)$$

此ノ式ニ於ケル  $k$  ハ比例恒數ニテ之ヲ熱貫流率ト呼ビ、單位壁面積 ( $F = 1 \text{ m}^2$ ) ヲ通リ單位時間 ( $\tau = 1 \text{ h}$ ) ニ兩流體ノ單位溫度差 ( $t_1 - t_2 = 1^\circ\text{C}$ ) ニ於テ貫流スル熱量ヲ表ハシ、ソノ「チメンション」ハ熱傳達率  $\alpha$  ト同様ナリ、乍併此ノ恒數ハソレ自身單純ナル物理的意味ヲ有スルモノニ非ズ、唯計算ノ便宜上用フル補助數タルニ過ギズ、上式ヲ書キ直シテ

$$Q = \frac{\tau F (t_1 - t_2)}{r_T} = \frac{\tau (t_1 - t_2)}{R_T}$$

茲ニ

$r_T = \frac{1}{k}$  ..... 單位壁表面積 ( $1 \text{ m}^2$ ) ニ對スル熱貫流抵抗、

$R_T = \frac{1}{kF}$  ..... 全熱貫流抵抗、

尙此ノ熱貫流抵抗ハ兩表面ニ對スル熱傳達抵抗  $r_{s_1}, r_{s_2}$  並ニ壁内ノ熱傳導抵抗  $r_c$  (後述) ノ和トナル事ハ明カナリ、

$$r_T = r_{s_1} + r_c + r_{s_2}$$

$$R_T = R_{s_1} + R_c + R_{s_2}$$

## 第二節 定常熱傳導

### 四、概説、

實際ニハ嚴密ニ前述ノ如キ一次元的熱傳導ノ行ハルル過程ハ存在セザルモ、多クノ場合例ヘバ靜止セル

空氣中ニ於テ一定溫度ノ蒸氣ガ斷續的ニ流ルル管壁、  
 又ハ保溫劑壁或ハ加熱(又ハ冷却)器等、傳熱壁兩側ノ流  
 體溫度ガ時間的ニ不變ナル場合ハ之等壁内外面ノ溫  
 度ハ時間的ニ一定トナリ、而モ主傳導以外ノ方向ニ於  
 ケル溫度ノ不同ハ尠ク、從ツテ近似的ニ一次元的熱傳  
 導過程ト看做シ得ルナリ、内部ニ熱源ナキ一次元的定  
 常熱傳導ノ一般微分方程式ハ前述ノ如ク

直角坐標、  $\frac{d^2\theta}{dx^2} = 0$

圓柱坐標、  $\frac{d^2\theta}{dr^2} + \frac{1}{r} \frac{d\theta}{dr} = 0$

球坐標、  $\frac{d^2\theta}{dr^2} + \frac{2}{r} \frac{d\theta}{dr} = 0$

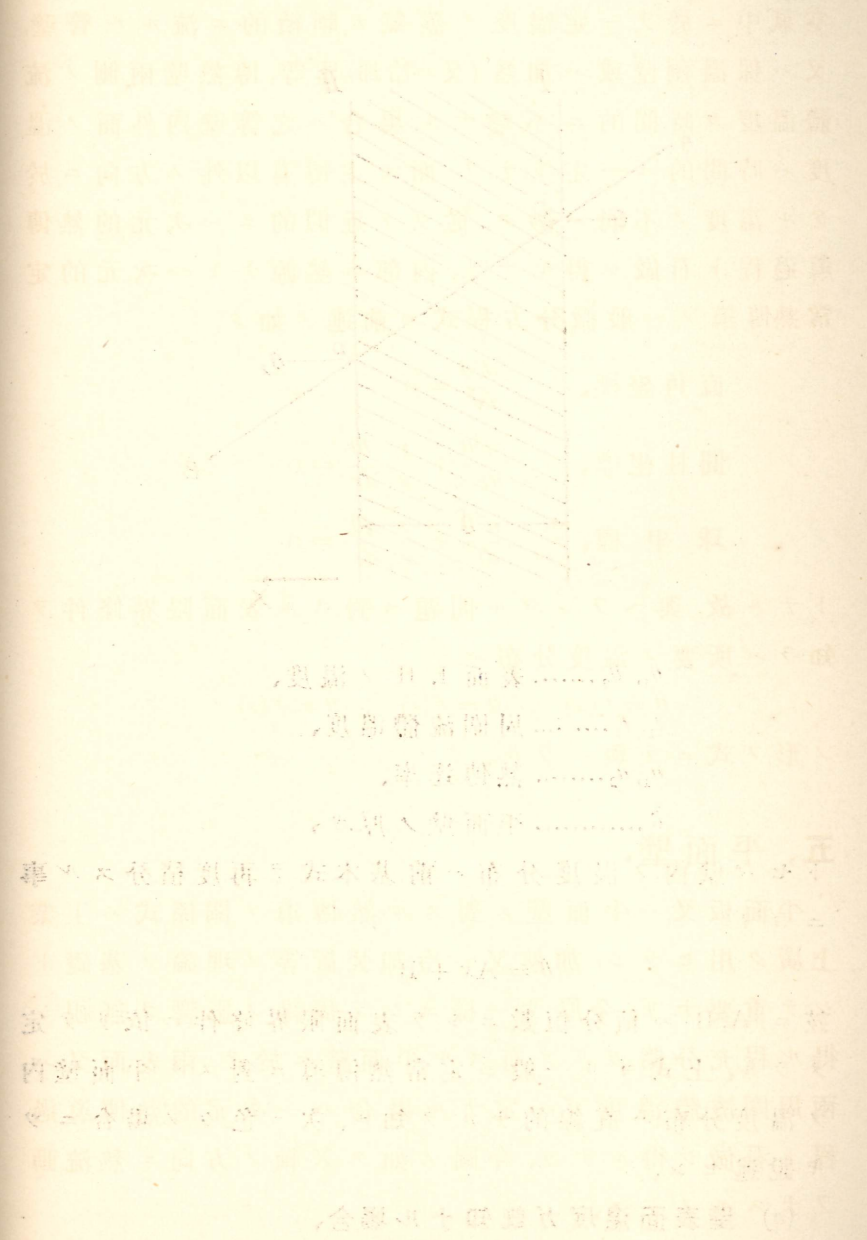
トナル故、與ヘラレタル問題ニ對スル表面限界條件ヲ  
 知ラバ所要ノ溫度分布ハ

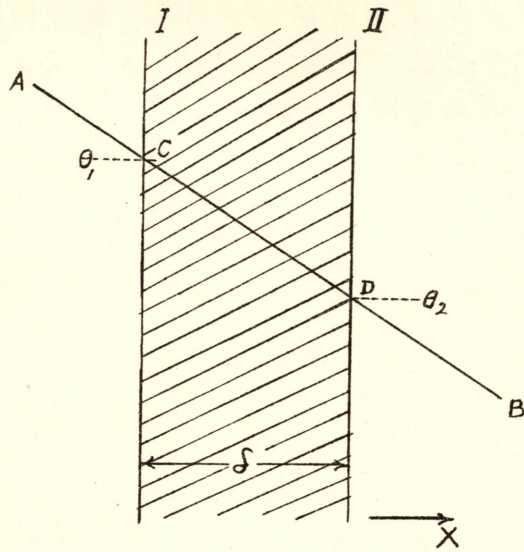
$$\theta = f(x) \quad , \quad \theta = f(r) \quad , \quad \theta = f(r)$$

ノ形ノ式ニテ與ヘラル、

### 五、平面壁、

平板又ハ平面壁ニ對スル熱傳導ノ關係式ハ工業  
 上廣ク用ヒラレ、加熱又ハ冷却裝置等ノ理論ノ基礎ト  
 シテ重要ナリ、今厚サ一様ニシテ周縁ノ影響ヲ無視シ  
 得ル程充分擴ガリヲ有スル平面壁ニ於テ、兩表面又ハ  
 兩周圍流體溫度ガ一定ナル場合ハ一次元的熱傳導過  
 程ト看做シ得ルナリ、今圖ノ如ク X 軸ノ方向ニ熱流動  
 フナスモノトス、





- $\theta_1, \theta_2$  ..... 表面 I, II ノ温度、
- $t_1, t_2$  ..... 周圍流體温度、
- $a_1, a_2$  ..... 熱傳達率、
- $\delta$  ..... 平面壁ノ厚サ、

トセバ壁内ノ温度分布ハ前基本式ヲ再度積分スル事ニヨリ

$$\theta = Ax + B$$

茲ニ A, B ハ積分恒數ニシテ表面限界條件ニ依リテ定メラル、上式ヨリ一般ニ定常熱傳導ニ對スル平面壁内ノ温度分布ハ直線的ナルヲ知ル、次ニ色々ノ場合ニツキ説述セン、

(a) 壁表面温度ガ既知ナル場合、

流體温度 (1)  
 又、セハ與テ、流體温度、...  
 壁内ノ温度分布ハ直線的ナルヲ知ル、次ニ色々ノ場合ニツキ説述セン、

(i) 單層平面壁、

表面限界條件トシテ兩表面溫度  $\theta_1, \theta_2$  ガ與ヘラレタル場合上式ノ未定積分恒數ハ

$$\begin{aligned} x = 0 & \quad \theta = B = \theta_1 \\ x = \delta & \quad \theta = A\delta + B = A\delta + \theta_1 = \theta_2 \\ \therefore & \quad A = \frac{\theta_2 - \theta_1}{\delta} \end{aligned}$$

從ツテ所要溫度ノ分布ノ式ハ次ノ如ク與ヘラル

$$\theta = \theta_1 + (\theta_2 - \theta_1) \frac{x}{\delta}$$

尙溫度ノ傾斜ハ微分シテ

$$-\frac{d\theta}{dx} = -\frac{\theta_2 - \theta_1}{\delta}$$

故ニ單位時間ニ對スル傳導熱量ハ

$$Q = -\lambda F \frac{d\theta}{dx} = \frac{\lambda}{\delta} (\theta_1 - \theta_2) F$$

又ハ

$$Q = \frac{\theta_1 - \theta_2}{\delta/\lambda} F = \frac{\theta_1 - \theta_2}{\delta/\lambda F}$$

茲ニ

$$r_c = \frac{\delta}{\lambda} \dots\dots\dots \text{熱傳導抵抗、}$$

$$R_c = \frac{\delta}{\lambda F} \dots\dots\dots \text{全熱傳導抵抗、}$$

此ノ式ヨリ與ヘラレタル溫度差ニ對スル傳導熱量ハ決定サレ、又ハ與ヘラレタル熱量ヲ傳導センガ爲ニ必要ナル溫度差モ定メ得ル、

尙若シ傳導熱量  $Q$  ト兩表面溫度ノ内何レカーツヲ知ラバ他ノ表面溫度ハ上式ヲ書キ直シテ

$$\theta_2 = \theta_1 - \frac{\delta}{\lambda} \frac{Q}{F} = \theta_1 - r_c \frac{Q}{F} = \theta_1 - R_c Q$$

$$\theta_1 = \theta_2 + \frac{\delta}{\lambda} \frac{Q}{F} = \theta_2 + r_c \frac{Q}{F} = \theta_2 + R_c Q$$

依リ求メ得、

[例] 混凝土 ( $\lambda=0.65$ ) 壁ノ大サ ( $3\text{m} \times 5\text{m}$ ), 厚サ ( $0.3\text{m}$ )  
 ノノ兩表面温度  $25^\circ\text{C}$  及  $5^\circ\text{C}$  ナル時 1 時間ノ傳導熱量ヲ  
 求ム、但シ周縁ノ影響ハ無視ス、

$$F = 3 \times 5 = 15\text{m}^2, \quad \theta_1 - \theta_2 = 25 - 5 = 20^\circ\text{C} \quad \delta = 0.3\text{m}$$

$$\therefore R_c = \frac{\delta}{\lambda F} = \frac{0.3}{0.65 + 15} = \frac{1}{32.5}$$

$$\therefore Q = \frac{\theta_1 - \theta_2}{R_c} = 32.5 \times 20 = 650 \quad (\text{Kcal/h})$$

[例] 厚サ 25 耗面積 1 平方米ノ平板ヲ通ル傳導熱量ヲ  
 毎時 1000 Kcal ニナサシガ爲ノ所要温度差ヲ下記  
 材質ニ就キ求ム、

$$F = 1\text{m}^2, \quad \delta = 0.025\text{m} \quad Q = 1000 \text{ Kcal/h}$$

$$\therefore \theta_1 - \theta_2 = \frac{\delta Q}{\lambda F} = \frac{0.025 \times 1000}{\lambda \times 1} = \frac{25}{\lambda}^\circ\text{C}$$

材質	$\lambda$	$\theta_1 - \theta_2$
銅	2000	$0.08^\circ\text{C}$
アルミニウム	175	$0.14$
鑄鐵	50	$0.50$
板硝子	$0.70$	$36$
アスベスト	$0.19$	$130$

(ii) 多層平面壁、

異ル厚サ並ニ熱傳導率ヲ有スル多層ヨリナル平面  
 壁ニ於ケル傳導熱量並ニ各層表面温度ハ各層ガ互ニ